

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第16集

切畑南遺跡Ⅱ

—平成11年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

2000

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター



写真1 切畑南遺跡上空より金山を望む



写真2 銅塊の出土状況

序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域環境の創造に向けて農業基盤整備事業等の緒施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い、地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、財団法人山口県教育財団では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲等について発掘調査を行い、その結果を記録として留め、郷土を築いてきた先人の足跡を後世に残すこととしております。

本書は、平成11年度防府市大道北地区の県営ほ場整備事業に先立ち、同地内に所在する切畑南遺跡について、当財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

今回の調査では、平安時代後半から、室町時代にかけての集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活文化を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

本報告書の刊行をもって、2カ年にわたる県営ほ場整備事業に伴う切畑南遺跡発掘調査は完了いたしました。既に刊行されている本事業に伴う調査報告書「切畑南遺跡」とともに、本報告書が多くの人々の利用に供され、広く県民文化の向上に寄与することを心より念願する次第です。

終わりに、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成12年3月

財団法人 山口県教育財団

理事長 牛見正彦

例 言

1. 本書は、山口県防府市切畑の切畑南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営ほ場整備事業（切畑南遺跡発掘調査）に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受け実施したものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター

調査担当 財団法人山口県教育財団

指導主事 椿 徹

同 林 信行

同 西尾 健司

文化財専門員 岩崎 仁志（山口県教育庁文化財保護課）

4. 調査に当たっては、山口県教育委員会、山口県農林事務所農村整備部、防府市大道土地改良区、防府市教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
5. 本書の第1図は、国土地理院発行5万分の1地形図を使用、第2図は山口県山口農林事務所農村整備部提供の地図を使用した。
6. 本書が使用した方位は、国土座標（第3座標系）の北で示し、標高は海拔標高である。
7. 本書に使用した土色の色調の表記は、Munsel方式による。（農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帳」）
8. 本書の遺構略号は、次のとおりである。
SB：住居跡、建物跡 SD：溝状遺構 SK：土坑 ST：埋葬跡
SX：伊跡 SP：柱穴
9. 本書における遺構及び遺物の時期比定は、切畑南遺跡出土古代～中世土器編年試案（第107図）による。
10. 本書付編の炉床跡土壌成分分析及び出土遺物成分分析については、応用地質株式会社による報告書より抜粋し、調査担当者が編集したものである。
11. 本書の実測図・写真の製作及び本書の執筆・編集は、椿・林・西尾・岩崎が共同で行った。

目 次

1	遺跡の位置と環境	1
2	調査の経緯と概要	3
3	調査の成果	14
(1)	4・5地区の建物跡と遺物	15
(2)	溝状遺構と遺物	41
(3)	4・5地区の土坑と遺物	42
(4)	埋葬跡と遺物	50
(5)	4・5地区の炉跡と遺物	51
(6)	4・5地区の柱穴と遺物	54
(7)	5地区の谷状地形と遺物	64
(8)	4・5地区の遺物包含層出土の遺物	67
(9)	6地区の建物跡と遺物	69
00	6地区の溝状遺構	78
01	6地区の土坑	79
02	6地区の柱穴と遺物	80
03	6地区の谷状地形の遺物及び遺物包含層出土の遺物	86
4	まとめ	88
	付 編	92

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第17図	SB05関連遺物実測図	23
第2図	周辺の地形と調査区設定図	5	第18図	4地区SB08実測図	24
第3図	4地区遺構配置全体図	10	第19図	5地区SB08実測図	24
第4図	5地区遺構配置全体図	11	第20図	4地区SB02実測図	25
第5図	6地区遺構配置全体図	13	第21図	SB02関連遺物実測図	25
第6図	4地区SB13・SD01実測図	15	第22図	5地区SB10実測図	26
第7図	SB13関連遺物実測図	15	第23図	5地区SB01実測図	26
第8図	4地区SB10・SD04実測図	17	第24図	SB01関連遺物実測図	26
第9図	SB10関連遺物実測図	17	第25図	4地区SB03実測図	28
第10図	4地区SB07・SD02・SD03実測図	18	第26図	5地区SB02実測図	28
第11図	4地区SB12実測図	19	第27図	4地区SB14実測図	29
第12図	SB12関連遺物実測図	19	第28図	SB14関連遺物実測図	29
第13図	5地区SB09実測図	20	第29図	4地区SB15実測図	29
第14図	4地区SB05-A実測図	22	第30図	SB15関連遺物実測図	29
第15図	SB05関連遺物実測図	22	第31図	5地区SB11実測図	31
第16図	4地区SB05-B実測図	23	第32図	SB11関連遺物実測図	31

第33図	4地区SB04実測図	33	第73図	5地区SX03・SX04・SX05実測図	53
第34図	4地区SB01実測図	33	第74図	4地区SP17遺物出土状況	55
第35図	SB01関連遺物実測図	33	第75図	SP17出土遺物実測図	57
第36図	5地区SB07実測図	34	第76図	4・5地区柱穴出土遺物実測図	58
第37図	5地区SB03実測図	34	第77図	4・5地区柱穴遺物出土状況(1)	59
第38図	5地区SB05実測図	35	第78図	4・5地区柱穴遺物出土状況(2)	61
第39図	4地区SB09実測図	35	第79図	4・5地区柱穴遺物出土状況(3)	62
第40図	5地区SB04実測図	35	第80図	5地区の谷状地形実測図	64
第41図	4地区SB06実測図	36	第81図	5地区の谷状地形出土遺物実測図	65
第42図	SB06関連遺物実測図	36	第82図	4・5地形包含層出土遺物実測図	67
第43図	4地区SB16実測図	38	第83図	6地区SB11実測図	71
第44図	SB16関連遺物実測図	38	第84図	6地区SB09実測図	71
第45図	5地区SB06・SD01実測図	39	第85図	SB09関連遺物実測図	71
第46図	SD01出土遺物出土状況実測図	39	第86図	6地区SB10実測図	72
第47図	SB06・SD01関連遺物実測図	39	第87図	6地区SB04実測図	72
第48図	4地区SB11実測図	40	第88図	6地区SB06実測図	72
第49図	4地区SD01・SD02・SD03出土遺物実測図	41	第89図	6地区SB08実測図	73
第50図	5地区SK12実測図	42	第90図	SB08関連遺物実測図	73
第51図	5地区SK15実測図	44	第91図	6地区SB01・SA01実測図	74
第52図	5地区SK06実測図	44	第92図	SB01・SA01関連遺物実測図	74
第53図	5地区SK14実測図	44	第93図	6地区SB02・SA02実測図	75
第54図	5地区SK02実測図	44	第94図	SB02・SA02関連遺物実測図	75
第55図	5地区SK11実測図	44	第95図	6地区SB07実測図	76
第56図	5地区SK04実測図	46	第96図	SB07関連遺物実測図	76
第57図	5地区SK13実測図	46	第97図	6地区SB05実測図	77
第58図	5地区SK18実測図	46	第98図	SB05関連遺物実測図	77
第59図	5地区SK07実測図	46	第99図	6地区SB03実測図	78
第60図	5地区SK09実測図	46	第100図	SB03関連遺物実測図	78
第61図	5地区SK03実測図	47	第101図	6地区SK02実測図	79
第62図	5地区SK10実測図	47	第102図	6地区SK01実測図	79
第63図	5地区SK01実測図	47	第103図	6地区柱穴出土遺物実測図	81
第64図	5地区SK08実測図	48	第104図	6地区柱穴遺物出土状況	83
第65図	4地区SK16実測図	49	第105図	6地区の谷状地形及び包含層出土遺物実測図	86
第66図	4地区SK01実測図	49	第106図	6地区の谷状地形出土遺物実測図	87
第67図	4地区SK06実測図	49	第107図	切畑南遺跡出土の古代～中世土器編年試案	91
第68図	SK06出土遺物実測図	49	第108図	火床炉模式図	94
第69図	5地区ST01実測図	50			
第70図	ST01出土遺物実測図	50			
第71図	4地区SX01・SX02実測図	51			
第72図	5地区SX01・SX02実測図	52			

写真目次

写真1	切畑南遺跡上空より金山を望む	写真33	4地区SB04（全景）	32	
写真2	銅塊の出土状況	写真34	4地区SB01（全景）	32	
写真3	南西上空より遺跡を望む	6	写真35	5地区SB07（全景）	32
写真4	4地区全景（南上空より）	7	写真36	5地区SB03（全景）	32
写真5	5地区全景（南上空より）	8	写真37	5地区SB05（全景）	32
写真6	6地区全景（南上空より）	9	写真38	4地区SB09（全景）	32
写真7	4地区SB10・SD04全景	15	写真39	5地区SB04（全景）	32
写真8	4地区SB07・SD02・SD03全景	15	写真40	4地区SB06（全景）	32
写真9	4地区SB12全景	15	写真41	SB01関連遺物	33
写真10	5地区SB09全景	15	写真42	SB06関連遺物	36
写真11	4地区SB13・SD01全景	16	写真43	4地区SB16全景	37
写真12	SB13関連遺物	16	写真44	4地区SB11全景	37
写真13	SB10関連遺物	17	写真45	5地区SB06・SD01全景	37
写真14	SB12関連遺物	19	写真46	SB16関連遺物	38
写真15	4地区SB05-A・B全景	21	写真47	SD01遺物出土状況	39
写真16	4地区SB08全景	21	写真48	SB06・SD01関連遺物	39
写真17	5地区SB08全景	21	写真49	SD01・SD02・SD03出土遺物	41
写真18	4地区SB02全景	21	写真50	5地区SK12完掘（南より）	42
写真19	5地区SB10全景	21	写真51	5地区SK15完掘（東より）	44
写真20	5地区SB01全景	21	写真52	5地区SK06完掘（南より）	44
写真21	SB01関連遺物	22	写真53	5地区SK14完掘（南より）	44
写真22	SB05関連遺物	23	写真54	5地区SK02土層（南より）	44
写真23	SB02関連遺物	25	写真55	5地区SK11完掘（南より）	44
写真24	SB01関連遺物	26	写真56	5地区SK04土層（東より）	46
写真25	4地区SB03全景	27	写真57	5地区SK13完掘（東より）	46
写真26	5地区SB02全景	27	写真58	5地区SK09完掘（東より）	46
写真27	4地区SB14全景	27	写真59	5地区SK07完掘（東より）	46
写真28	4地区SB15全景	27	写真60	4地区SK18完掘（西より）	46
写真29	SB14関連遺物	29	写真61	5地区SK03土層（南より）	47
写真30	SB15関連遺物	29	写真62	5地区SK10土層（西より）	47
写真31	5地区SB11全景	30	写真63	5地区SK01炭の出土状況（南より）	47
写真32	SB11関連遺物	31	写真64	5地区SK08土層（北より）	48

写真65	SK06出土遺物	49	写真80	6地区獨立柱建物群(SB04~SB11)	69
写真66	ST01完掘(北より)	50	写真81	6地区SB01・SB02・SA01・SA02全景	70
写真67	ST01出土遺物	50	写真82	6地区SB03全景	70
写真68	4地区SX01・SX02土層(南より)	51	写真83	SB09関連遺物	71
写真69	5地区SX01・SX02土層(西より)	52	写真84	SB08関連遺物	73
写真70	5地区SX03・SX04・SX05土層(東より)	53	写真85	SB01・SA01関連遺物	74
写真71	SP17遺物出土状況	55	写真86	SB02・SA02関連遺物	75
写真72	SP17出土遺物	56	写真87	SB07関連遺物	76
写真73	銅塊に付着した靱	57	写真88	SB05関連遺物	77
写真74	4・5地区柱穴出土遺物	58	写真89	SB03関連遺物	78
写真75	4・5地区柱穴遺物出土状況(1)	60	写真90	6地区SK02完掘	79
写真76	4・5地区柱穴遺物出土状況(2)	63	写真91	6地区SK01完掘	79
写真77	5地区の谷状地形(北より)	64	写真92	6地区柱穴出土遺物	82
写真78	5地区の谷状地形出土遺物	66	写真93	6地区柱穴遺物出土状況	84
写真79	4・5地区包含層出土遺物	68	写真94	6地区の谷状地形及び包含層出土遺物	87

表 目 次

表1	土壌試料測定条件	93	表4	金属遺物測定条件	94
表2	土壌試料測定結果一覧	93	表5	金属遺物測定結果一覧	95
表3	土壌中の各元素の存在量	93			

1 遺跡の位置と環境

切畑南遺跡は、東（りやうごんじやうじん 楞嚴寺山）・北（あまやま 金山）・西（はながたけ 花ヶ岳）の三方を山で囲まれ、金山の山麓方向に広がった平地に所在する。楞嚴寺山を隔てた東方向には、周防国府の置かれた県内最大の防府平野が広がっている。

切畑南遺跡は、昨年を引き続いて本年が2年次の発掘調査である。昨年の遺跡が中世から近世にわたっての集落遺跡であったのに対して、本年度は平安時代から室町時代までの集落を中心とした遺跡である。同時期の遺跡としては、周辺（すほうこくがあと 周防国衙跡、しもみぎたいせき 下石田遺跡、たまのいせき 玉祖遺跡（以上防府市内）や東禅寺（とうぜんじ 東禅寺）、くみやまいせき 黒山遺跡、あみついでいせき 上辻遺跡、すぜんじおおとしいせき 鑄銭司大蔵遺跡（以上山口市内）などがある。

「切畑」という地名の由来は、「往古深山にて有之時分、防府之者切畑入り百姓に参り候故、切畑と申ならわし候」『防長地下上申』とあるように、ここで農業を始めたことに由来するというものと、「達理山の山麓地帯に開けた耕地故に切畑と名付けた」というものがある。

切畑地区は、周りを山々に囲まれてはいるものの「南方打開心候日受け宜く」『風土注進案』にあるように穏やかな気候に恵まれ、農耕に適していたと思われる。確認された遺跡当時は、切畑地区南方約2kmのところまで小俣の海と呼ばれる入り海が迫っていたと考えられ、その海岸線に沿って主要幹線である山陽道が東西に走り、千切峠を越え山口に通じる山口道にも面していた。当時の重要な輸送手段である海運にも恵まれていたことから、人や物の往来は盛んであったと想像される。

8世紀に作られた『続日本紀』によると、「吉敷郡達理山所出の銅をその国にて採冶」とあるように、銅鉱石を周防国司が採掘、製錬し、長門鑄銭司に送ったことが確認できる。注目すべき点は、その達理山（達理山ともいう）が本遺跡の北西に位置する金山（現在は採石場）のことではないかといわれていることである。事実、切畑地区からあまやま 金山を越えた西方わずか4kmの所に長門鑄銭所の停止・移転とともに新設された周防鑄銭所が所在し、おしよらう 押地峠を越えた東方約8kmの所には周防国府が存在している。また、銅の溶解・製錬に必要な薪炭や良質の粘土を持続的に供給しうる適地を周辺に控えている点も注目したい。

周防鑄銭司は藤原純友の乱により940年に焼失し、その後衰退する。そして、11世紀初頭には約200年もの間続いてきた国内有数の鑄銭司としての歴史的役目を終えることとなる。

昨年の切畑地区での発掘調査で、スラグが付着し口縁端部に緑青がみられるルツボ破片が出土している。これらのルツボ破片およびスラグは銅生産に関する遺物と考えられ、中世においても銅をこの地で生産していたと考えられる。また、昭和6年発行『防長地名源流』の中で、御園氏は「聖武紀天二年に見えたる周防国達理山銅鉱、疑ふらくは切畑西山鉱山なるべし。新旧銅坑処々に存す。」と述べ、達理山を現在の金山と推定している。著者の生存中の現地調査に基づく記載なので、昭和6年頃まで坑道の跡が残っていたことは間違いないところである。藩政時代にかかれた切畑村絵図『防長風土注進案』に、「給領預り」（藩士に給付された知行地）とされている範囲と現在の金山とその周辺の位置が一致するという事実も興味深い。



- | | | | |
|------------|-----------|-----------|----------|
| 1 切畑南遺跡 | 2 弥市原遺跡 | 3 天神原遺跡 | 4 周防鉦銭司跡 |
| 5 東禪寺・黒山遺跡 | 6 上辻遺跡 | 7 上り熊遺跡 | 8 市遺跡 |
| 9 小俣遺跡 | 10 柴山古墳群 | 11 繁枝砂丘遺跡 | 12 岩瀨古墳 |
| 13 切畑遺跡 | 14 台ヶ原古墳群 | 15 佐野窪跡群 | 16 玉祖遺跡 |
| 17 大判池古窯跡 | 18 大日古墳 | 19 下山ノ口遺跡 | 20 大河内遺跡 |
| | | | 21 下右田遺跡 |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

〔参考文献〕

- | | |
|---|--|
| 山口県教育委員会
御園生翁甫
防府市教育委員会
山口県教育委員会
山口県地方史学会
下中 邦彦
中村 浩 他
監修 坪井 清足
山口県文書館
清水 唯夫 | 「下右田遺跡 第3次調査概報」 1979年
『防府市史』 1960年 『防長地名淵源』 1931年
『周防国府跡』 1987年 『周防の国衛』 1967年
『周防鉦銭司跡』 1978年
『防長地下上申 二』 1978年
『山口県の地名』（日本歴史地名体系36） 1980年
『須臾器集成図録 第5巻 西日本編』 1996年
『新版 古代の日本 中国・四国』 1992年
『防長風土注進案 第9巻 三田尻宰判 上』 1964年
『防長歴史探訪 三』 1994年 |
|---|--|

2 調査の経緯と概要

山口県教育委員会では、農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、山口県農林部農村整備課と協議を行い、事業を施工するにあたり埋蔵文化財の削平が工法上避けられない範囲については、記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施してきた。防府市切畑でもは場整備事業が進められており、平成12年度施工対策地についても事前に、山口県教育委員会による事前調査が行われた。その結果、遺跡の存在が確認された。よって、昨年度に引き続き、山口県教育委員会の委託により、財団法人山口県教育財団が発掘調査を行うことになった。

平成11年4月、発掘調査を始めるに当たって、山口県農林事務所農村整備部、大道土地改良区、防府市教育委員会等、関係機関と綿密な打ち合わせを行うとともに、近隣の幼稚園・小学校・中学校・警察署・消防署等に安全確保のための協力と理解を要請した。

本年度の発掘調査は、昨年度と同一地区で、調査範囲もほぼ隣接状態なので、調査区を昨年度の1地区・2地区・3地区の続きとし、4地区・5地区・6地区とした。

委託契約の終了後、調査区の確認や業者との打ち合わせ等の諸準備を済ませ、4月22日に、重機による表土除去作業を4地区より開始した。5月7日には作業員を地元の西山集会所に集めて、本年度の発掘調査についての説明会を行った。5月10日には、機材を搬入するとともに、作業員を使って本格的な発掘調査を始める。5月中旬に入った頃は、重機による表土除去は、4地区から5地区へ移っていった。

作業員は、昨年に引き続き参加していただいた方が多く、献身的かつ和やかな雰囲気、4地区の遺構検出が進んでいった。重機による表土除去を終えた後を追いかけるように、作業員による遺構検出が進んでいった。安全面には細心の注意を払った。5月下旬頃になると、重機による表土除去は5地区から、約150メートル離れた6地区へと移り、5月30日には完了した。その間、遺構検出、掘り込み、遺構実測も順調に進んだ。しかし、6月中旬の入梅から、7月下旬にかけ、悪天候のため作業日の確保が難しく、発掘作業はおもうようにはかどらなくなった。7月の中頃には、6地区の発掘調査はほぼ完了した。以後、4地区、5地区の作業を同時に進めた。8月に入り、天候に恵まれたことと作業員の数が大幅に増えたことで、6月と7月



重機による表土除去



作業員さんたちの発掘作業風景

の作業の遅れを徐々に解消していった。

9月23日の台風18号は大型で強かった。調査区を保護するために敷いたシートが、ほとんど飛び散ったが、遺構面は被害をほとんど受けなかった。施設の被害では、2か所の仮設トイレが倒壊した程度ですんだし、業者の方でトイレの交換・設置を速やかにしていただいた。空中写真撮影を間近に控えていたので、大型台風の襲来には緊張した。10月4日には、台風18号の影響は少なく空中撮影は無事完了した。10月11日は、現地説明会を行った。発掘調査に対する地元の関心は高く「大道を掘り起こす会」を中心に、地元の方々の多数の参加が得られ、近郊からも多数の参加を得た。報道関係者も県内4テレビ局をはじめとし、新聞者等も数社取材に訪れ盛大な現地説明会になった。4地区で発掘された2基の炉跡は特に参加者の関心を集めた。

11月1日には、機材を搬出し、以後は記録作成を行った。

11月16日に、現地で受託者立ち会いのうえ、現場の引き渡しをし現地での調査は完了した。

本年度の調査で確認できた主な遺構としては、掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・炉跡・埋葬跡などがあげられる。検出された遺物は、椀・坏・皿などの土師器、鍋・足鍋・羽釜・摺鉢・捏鉢等の瓦質土器のほか、緑釉陶器、青磁碗・皿、白磁碗・皿、籬の羽口やたたき石、銅塊、刀子・釘などの鉄製品、炭化米等の古代から中世にかけてのものが中心に出土した。遺構には伴わないが、石斧や石鏃、土錘や土玉、染付青磁皿、甕形土器、甕なども採集された。これらの遺物から、長い時代にわたって人々がこの地で生活を営んできた様子がうかがえる。

本調査では、前記のように古代から中世にかけての貴重な資料が多数出土した。5月から始まった発掘調査は、梅雨期の降雨で多少の遅れはみられたが、事故もなくほぼ順調に終えることができた。これも、作業員の方々に快く発掘作業に参加していただいたことと、関係各位の多大なご理解・ご協力・ご援助によるものと感謝する。

出土遺物は、洗浄・復元・実測・写真撮影を山口県埋蔵文化財センターにおいて行い、調査資料を整理してこの報告書を刊行した。



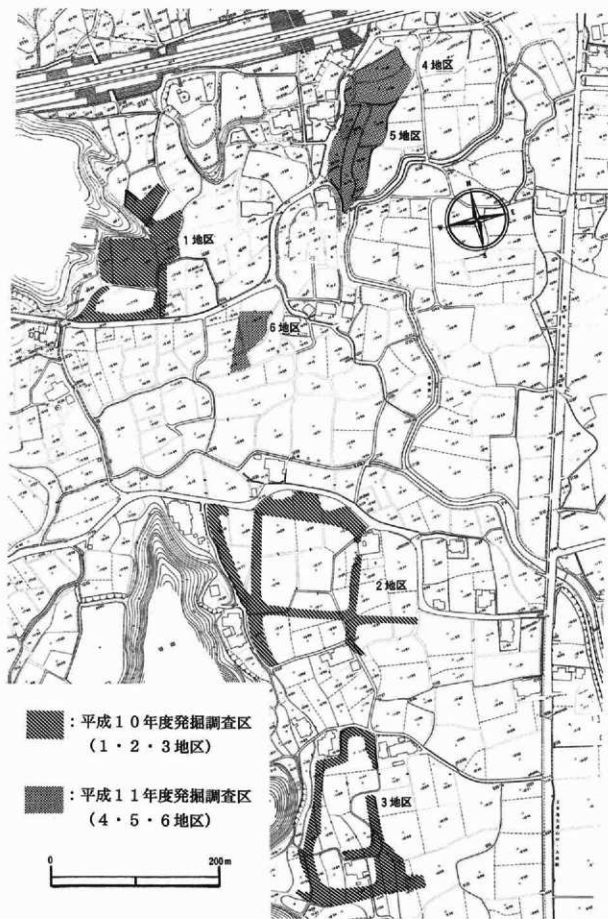
発掘調査に携わった作業員の方々



空中写真撮影のラジコンヘリコプター



多数の参加があった現地説明会



第2図 周辺の地形と調査区設定図



写真3 南西上空より遺跡を望む



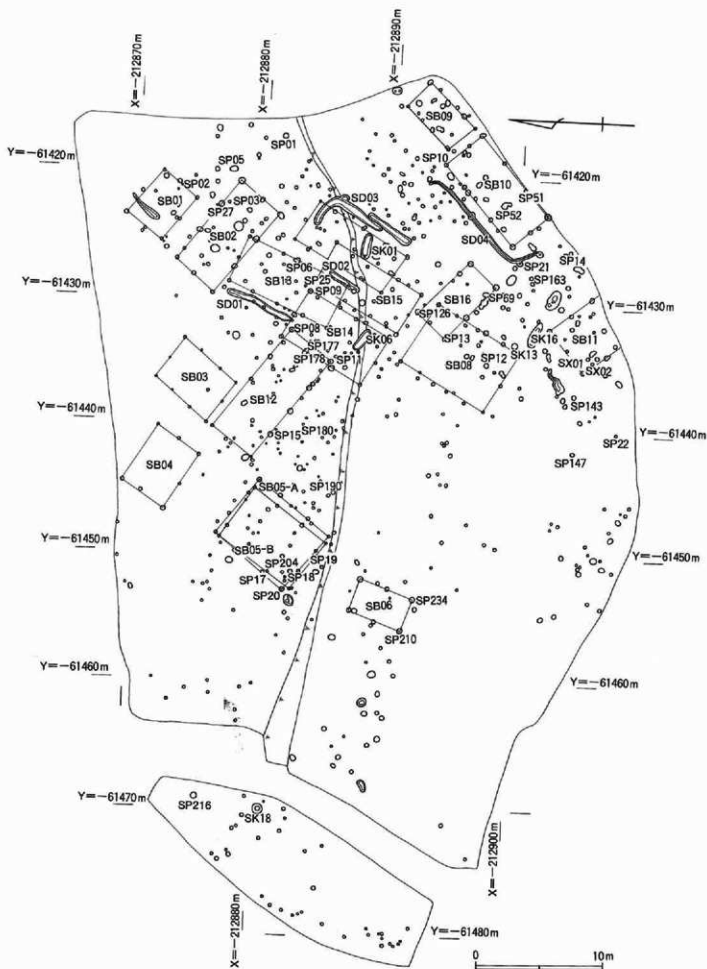
写真4 4地区全景（南上空より）



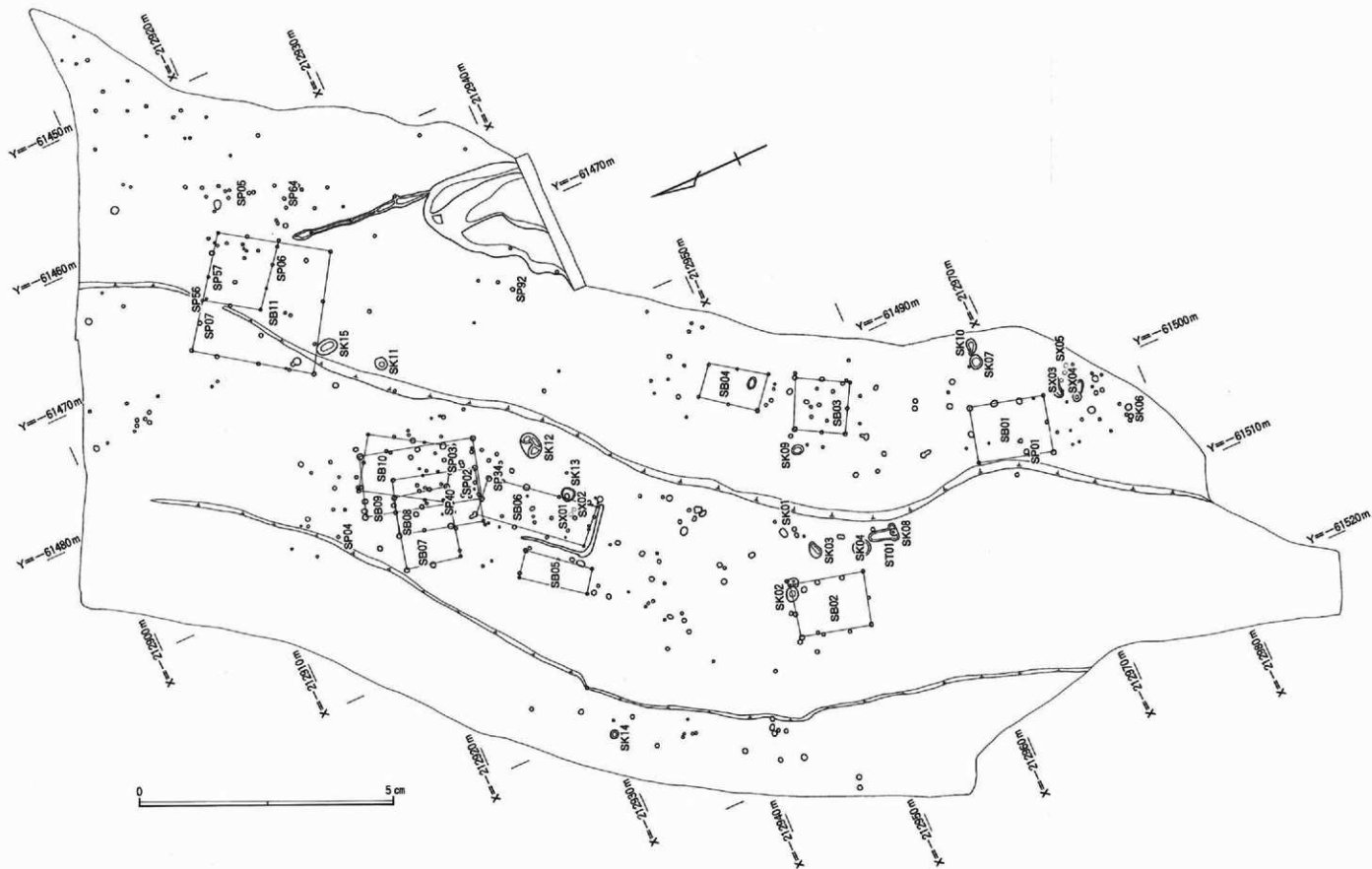
写真5 5地区全景（南上空より）



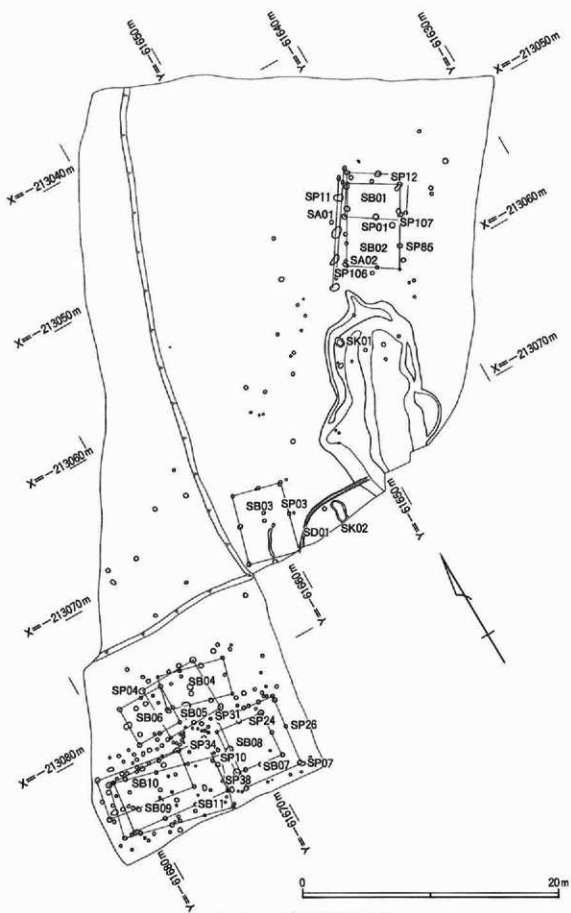
写真6 6地区全景(南上空より)



第3图 4地区道槽配置全体图



第4图 5地区遺構配置全体図



第5图 6地区遺構配置全体図

3 調査の成果

今年度の調査対象となった地区は、昨年度の対象地区の北へ位置し、隣接する4・5地区があり、昨年度の対象地区である1地区と隣接して6地区が位置する。

各地区ともに、中起伏山地の裾野に広がる砂礫台地に遺構の多くが掘り込まれている。遺構や遺物の残存状況は比較的良好であり、調査によって、掘立柱建物跡39棟、溝状遺構7条、土坑20基、埋葬跡1基、炉跡7基及び1500余りの柱穴を検出することができた。

遺構の密度については、4地区2000㎡に対して掘立柱建物跡17棟、溝状遺構4条、土坑6基、炉跡2基、柱穴650個を検出することができた。5地区4000㎡に対して掘立柱建物跡11棟、溝状遺構2条、土坑8基、埋葬跡1基、炉跡5基、柱穴426個を検出し、6地区においては1200㎡に対して掘立柱建物跡11棟、溝状遺構1条、土坑2基、柱穴420個を検出した。

遺構に伴う遺物については、4地区では土師器・瓦質土器・青磁・白磁・石製品・鉄製品・銅製品銅塊等があげられ、5地区においては、土師器・瓦質土器・青磁・白磁等が検出された。4・5地区で確認された炉跡や銅製品・銅塊・スラグから精錬または鍛冶を行った工場の存在が推定される。6地区からの遺物としては、土師器・甕形土器・瓦質土器・炭化米等が検出されている。また、5地区・6地区に谷状地形が確認でき、埋土中より多くの遺物が出土した。

各遺構、遺物の説明について4・5地区においては、地区どうしが接していることや遺構が同時期に形成されたと考え、地区を区別しなかった。ただ、各遺構には、各地区の地区番号を付記した。遺構・遺物の説明順は以下の通りである。(1)建物跡と遺物、(2)溝状遺構と遺物、(3)土坑と遺物、(4)埋葬跡と遺物、(5)炉跡と遺物、(6)柱穴と遺物。なお、これらの説明の後に各地区の谷状地形と遺物、遺物包含層と遺物の説明を加えることとする。

(1) 4・5地区の建物跡と遺物

建物跡は、すべてが掘立柱建物跡であり4・5地区では28棟検出された。建物を構成する柱穴から建物の時期を比定できる遺物が比較的多く検出された。このことから、建物28棟は11世紀から16世紀のものと考えられる。その中で、11世紀から12世紀の建物が25棟であり、この時期を中心として集落が形成されたと考えられる。また、これらの建物の中に溝を伴う可能性のあるものが4棟確認できたため、ここでは溝状遺構の項目とは別に建物との関連を踏まえて説明を加えていく。

4地区SB13(第6図・写真7) 2間×4間の建物である。棟方向は、N25°E。梁行長480cm・桁行長880cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径が30~40cm・深さ30~40cmである。南東角の柱穴は4地区SD04によって切られており、検出できなかった。SP06より土師器皿が出土しており(第7図)、12世紀に比定される。4地区SD01は、SB13の西側面と平行に南北に延び、長さ580cm、幅40~60cm、深40~45cmを測る。埋土中より11世紀から12世紀に比定できる土師器坏が出土している(P41第49図・写真49)。これらのことから、4地区SB13に4地区SD02が伴っていたと推定される。

4地区SB10(第8図・写真9) 2間×3間の総柱の建物である。棟方向は、N48°E。梁行長370



写真7 4地区SB10・SD04全景

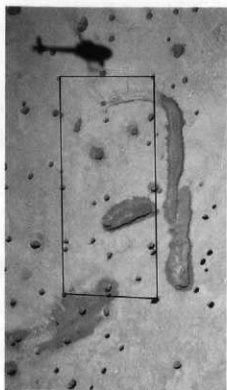


写真8 4地区SB07・SD02・SD03全景

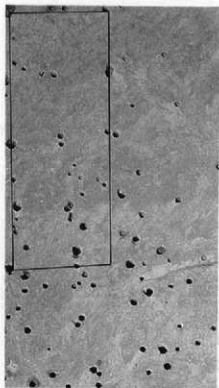


写真9 4地区SB12全景

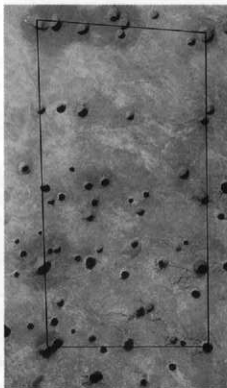
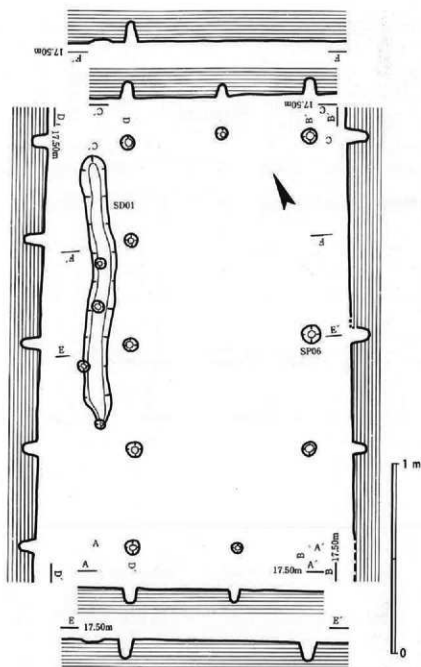
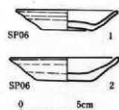


写真10 5地区SB09全景



第6図 4地区SB13・SD01実測図

cm・桁行長830cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径が25~60cm・深さ20~65cmである。建物の南角部分は、後世の削平により柱穴の残存状況が悪い。SP51から土師器椀・白磁皿、SP52から土師器皿（第9図・写真13）を検出した。4は土師器椀で、高台は張り付け。断面三角である。5は、白磁皿。体部外面は回転へら削り。ともにSP51より出土。3は、土師器皿。底部に糸切り痕を有する。これらは、はいずれも12世紀に比定できる。SP52より出土。4地区SB10は、4地区SB09と隣接しており、方向性が等しいことから同時期のものと考えられる。



第7図 SB13関連遺物実測図

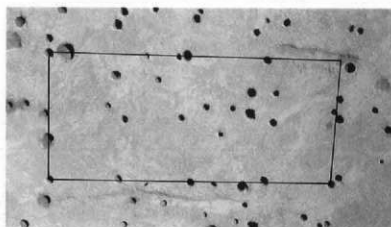


写真11 4地区SB13・SD01全景

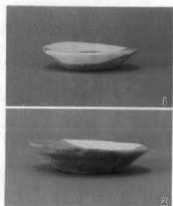
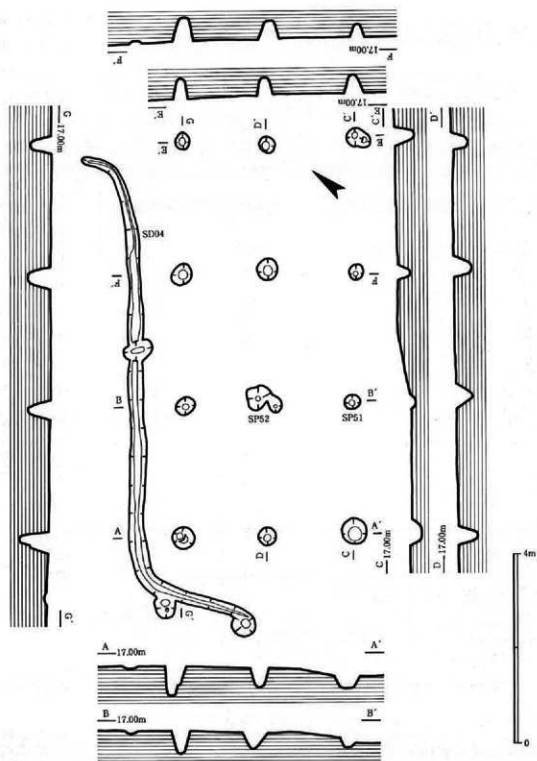
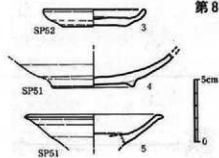


写真12 SB13関連遺物



第8图 4地区SB10・SD04夹测图



第9图 SB10関連遺物夹测图

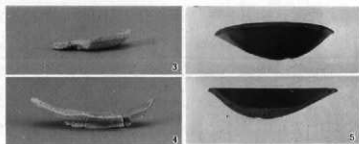
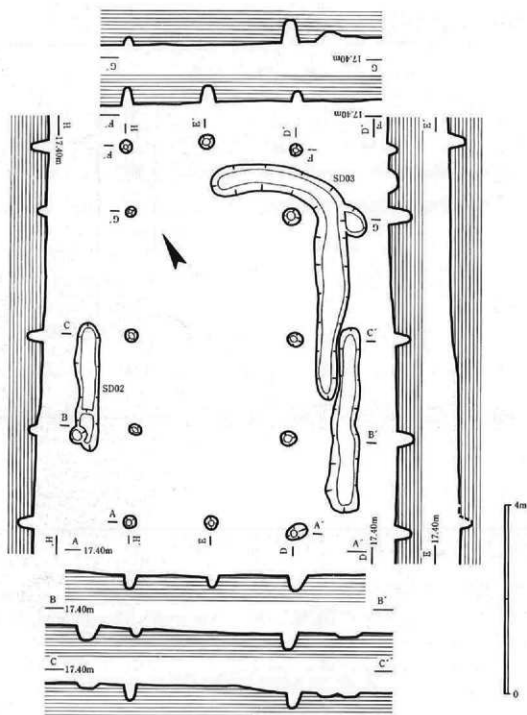


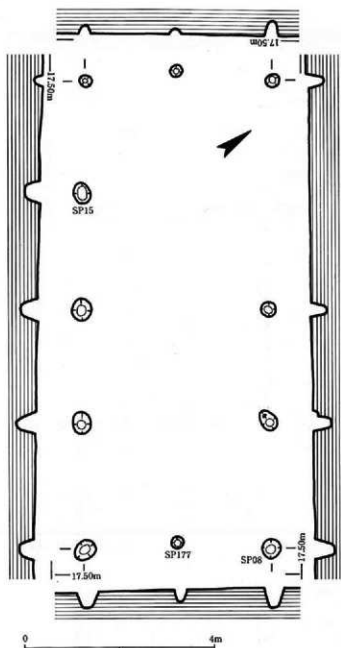
写真13 SB10関連遺物



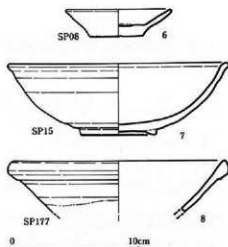
第10図 4地区SB07・SD02・SD03実測図

4地区SD04は、幅20~40cm、深さ5~7cmである。SB10の北と西の面を囲むかたちで延びている。斜面上位から斜面下位（北から南）に向かって伸びていたと考えられるが、溝の残存状況が悪く、はっきりとした方向性が確認できなかった。SD04からの遺物は出土していないが、4地区SB10の北西面に平行に走っていることからして、同時期の可能性がある。

4地区SB07（第10図・写真10） 2間×3間の建物であり、北面に庇をもつ。棟方向はN31° E。梁行長350cm・桁行長690cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径20~36cm・深さ20~56cmである。母屋から145cmの所に庇を構成する柱穴をもつ。柱穴の規模は、径25~32cm・深さ25~36cmである。4



第11図 4地区SB12実測図



第12図 SB12関連遺物実測図

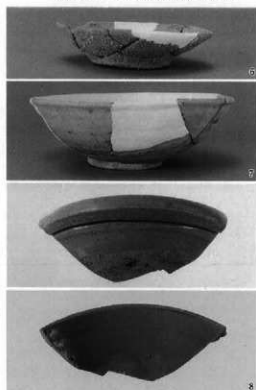
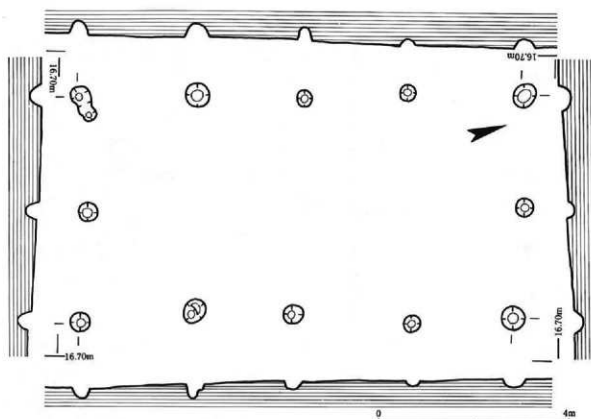


写真14 SB12関連遺物

地区SB14と方向性が等しいことから、11世紀後半から12世紀に比定できる。母屋の西面に4地区SD02が北面から東面にかけて4地区SD03が位置している。4地区SD02・SD03から時期を比定できる遺物が出土した（P41 第49図・写真49参照）。4地区SD02・SD03は12世紀と比定される。母屋と溝の関係は、同時期の可能性を残す。また、4地区SB07は、4地区SB15とは、併存はしないが、方向性が同じことから建て替えの可能性はある。

4-SB12（第11図・写真11） 2間×4間の中央に柱をもたない建物であり、棟方向はN53° W。梁行長400cm・桁行長1000cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径25～50cm・深さ16～50cmである。SP08・SP15・SP177から遺物が出土した（第12図・写真14）。6は、土師器台付皿である。土師器台付皿については、底部の厚みが1cm以上のもので分類した。SP08より出土。7は、土師器碗である。ミズビキであり底部は糸切り、高台は張り付けである。SP15より出土。8は、玉縁をもつ白磁碗で



第13図 5地区SB09実測図

ある。外面は回転ヘラ削りである。SP177より出土。いずれも、11世紀と比定できる。

5地区SB09 (第13図・写真12) 2間×4間の副柱の建物である、棟方向はN21° E。梁行長480cm・桁行長900cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径30～60cm・深さ15～36cmである。建物の北面は、後世の削平が著しく柱穴の残存状況が悪い。柱穴から時期を比定できる遺物はほとんど出土していない。

4地区SB05-A (第14図・写真15) 2間×3間の建物で東面に庇をもつ。棟方向はN39° E。梁行長410cm・桁行長700cmを測る。母屋を構成する柱穴の規模は、径24～40cm・深さ24～50cmである。庇は母屋東面から136cmのところであり、4つの柱穴で構成されている。柱穴の規模は、径32～40cm・深さ32～40cmである。母屋・庇を構成する柱穴の残存状況は比較的良好である。SP16・SP17・SP18・SP20から遺物が検出された(第15図・写真21)。9は、土師器台付皿である。底部切り離しは糸切り。SP16より出土。12は、土師器脚付皿。内外面ともミズビキで、高台は張り付け。銅塊・鉄釘が共に出土(P57・P58参照)。SP17より出土。13・14は、土師器椀。高台は張り付け。ともにSP17より出土。10は、土師器皿。SP18より出土。11は、土師器杯である。SP20より出土。いずれも11世紀～12世紀と比定できる。4地区SB12と方向性が等しいと考えれば、2つの住居は同時期のものと考えられる。

4地区SB05-B (第16図・写真15) 4地区SB05-Aの建て替えられた建物と考えられる。2間×3間の建物であり、母屋西面に庇をもつ。棟方向はN36° E。梁行長380cm・桁行長700cmを測る。母屋を構成する柱穴の規模は、径24～50cm・深さ20～40cmである。庇は、母屋西面から90～110cmに位置する。庇を構成する柱穴の規模は、24～34cm・深さ24～50cmである。SP19・SP204から遺物が出土した

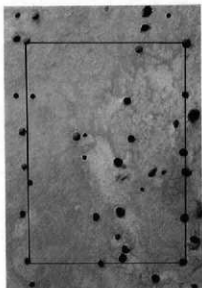


写真15 4地区SB08全景

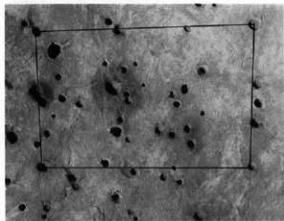


写真16 5地区SB08全景

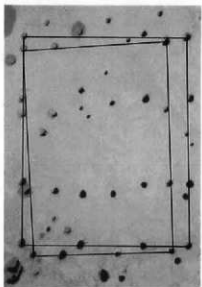


写真17 4地区SB05-A・B全景

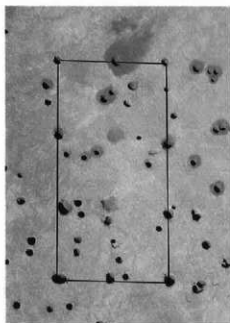


写真18 4地区SB02全景

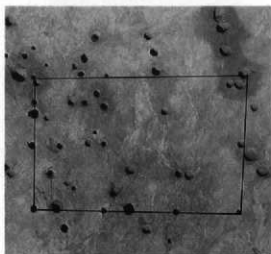


写真19 5地区SB10全景

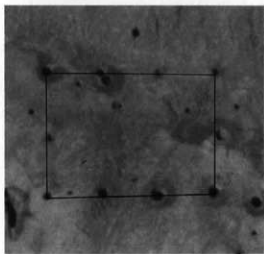
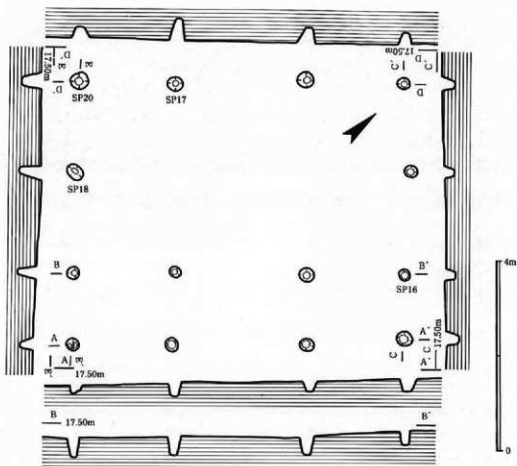
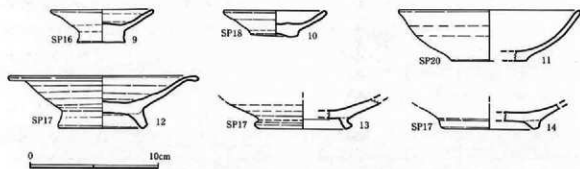


写真20 5地区SB01全景



第14図 4地区SB05-A実測図



第15図 SB05-A関連遺物実測図

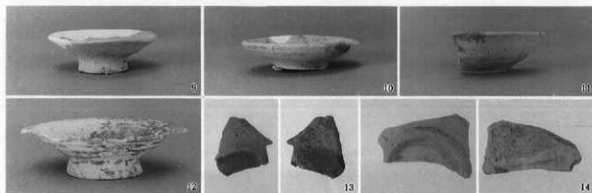
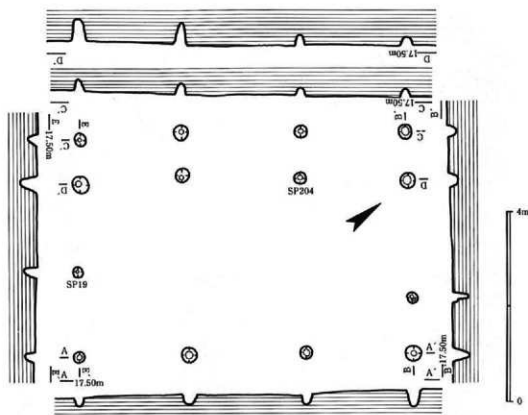
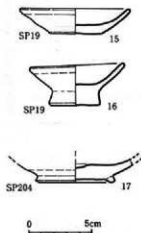


写真21 SB05-A関連遺物



第16図 4地区SB05-B実測図



第17図

SB05-B関連遺物実測図

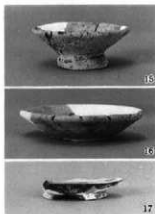


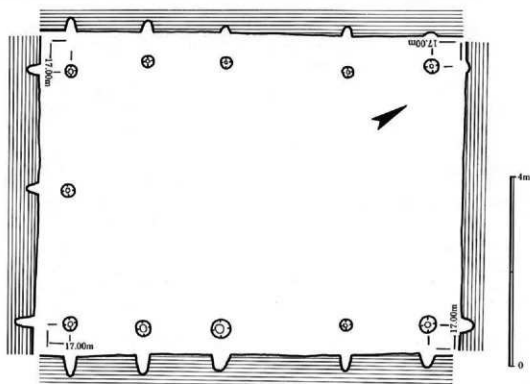
写真22

SB05-B関連遺物

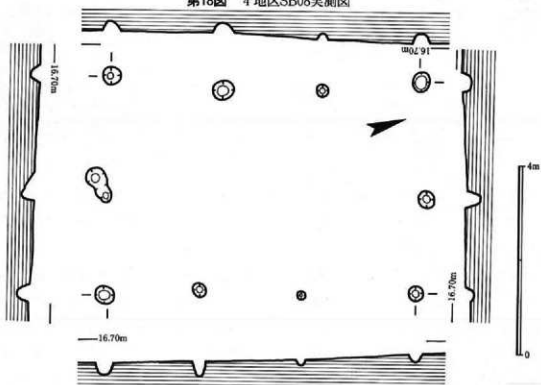
(第17図・写真22)。15は、土師器皿。底部切り離しは糸切り。SP19より出土。16は、土師器台付皿。底部切り離しは糸切りである。SP19より出土。17は、土師器椀。底部切り離しは糸切り。高台は、貼り付けである。SP204より出土。いずれも11世紀後半から12世紀と比定できる。4地区SB-05Aと4地区SB-05Bとの関係は、それぞれの柱穴から出土した遺物から建物の新旧関係を考えて、4地区SB-05Aが11世紀前半

に比定でき、4地区SB-05Bが11世紀後半から12世紀前半と比定できるため、4地区SB-05Aが建てられた後に、4地区SB-05Bが再びほぼ同位地に建て替えられたと言える。同じ場所にこだわって建物を建て替えていることについては、環境要因より銅塊の出土(精錬等における祭祀)との関係が深いと考える。それぞれの住居から精錬炉と言えるものが確認できなかった。ただ、2つの住居の南東に炉の底部と思われる焼土痕が確認された。炉が火床炉とすれば、炉自体の深さが浅いため、遺構面の削平によって炉が消失した可能性がある。

4地区SB08(第18図・写真16) 2間×4間の建物である。建物北面の中央の柱は、検出できなかった。棟方向は、N31° E。梁行長550cm・桁行長745cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径25～45cm・深さ10～40cmである。各柱穴からは、時期を比定できるような遺物は、ほとんど出土しなかつ



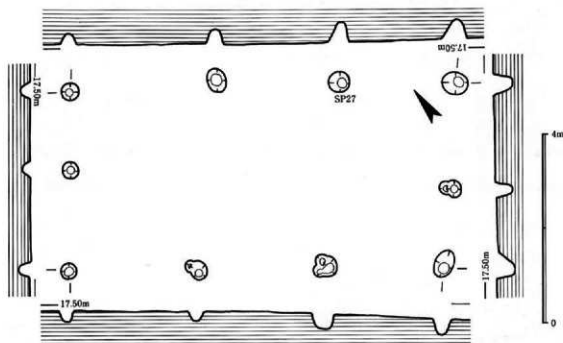
第18図 4地区SB08実測図



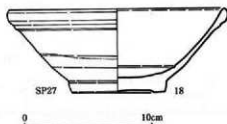
第19図 5地区SB08実測図

た。建物の北西面から2mの所に4地区SB15があり、棟方向が等しいことから同時期の建物と言える。

5地区SB08 (第19図・写真17) 2間×4間の建物である。棟方向は、 $N18^{\circ}E$ 。梁行長450cm・桁行長785cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径16~50cm・深さ16~40cmである。建物北面の柱穴周辺の削平が著しい。各柱穴からは、時期を比定できるだけの遺物は検出されていない。ただ、4



第20図 4地区SB02実測図



第21図 SB02関連遺物実測図



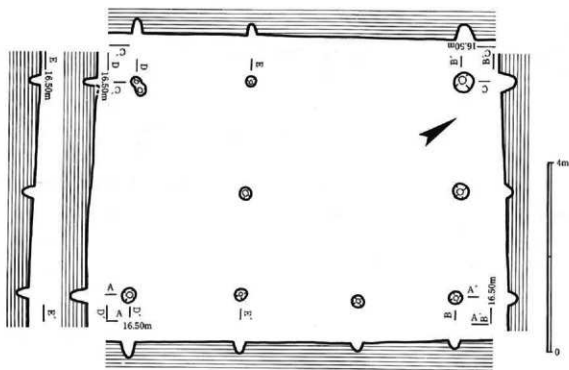
写真23 SB02関連遺物

地区SB08・SB15と方向性が等しいことから、12世紀の建物と考えられる。5地区SB08と5地区SB09とは重なりあっている。新旧関係は、どちらの建物からも時期を比定できる遺物が検出されていないために不明である。

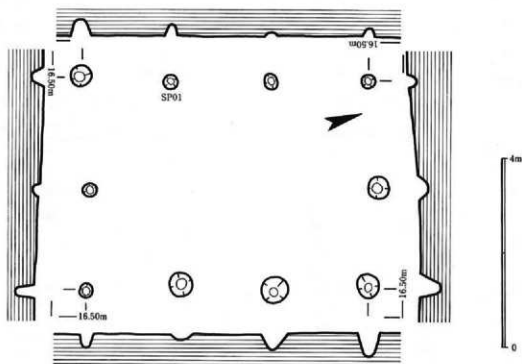
4地区SB02（第20図・写真18） 2間×4間の建物である。棟方向は、 $N53^{\circ}W$ 。梁行長385cm・桁行長810cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径36～65cm・深さ16～40cmである。SP27より遺物が検出されている（第21図・写真23）。18は、玉緑の白磁碗。11世紀後半ないし12世紀に比定できる。建物から北東2mの所に4地区SB01が並立する。方向性が等しいことから、同時期の建物と言える。

5地区SB10（第22図・写真19） 2間×3間の建物である。中央の柱穴は、床を支える束柱の可能性が考えられる。棟方向は、 $N36^{\circ}E$ 。梁行長465cm・桁行長710cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径25～40cm・深さ20～40cmである。時期を比定する遺物が、出土していない。

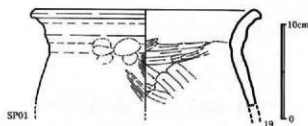
5地区SB01（第23図・写真20） 2間×3間の建物である。棟方向は、 $N16^{\circ}E$ 。梁行長440cm・桁行長610cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径32～56cm・深さ16～50cmである。SP01から遺物が検出された。（第24図・写真24）19は、土師器瓶で胎土に砂を多く含む。11世紀に比定できる。また、この建物の南1.5m地点に炉が3基検出されており（P53～P54 第73図・写真70参照）、建物と同



第22图 5地区SB10实测图



第23图 5地区SB01实测图



第24图 SB01関連遺物实测图

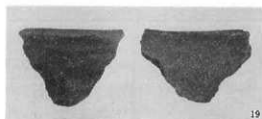


写真24 SB01関連遺物

時期のもの可能性がある。

4 地区SB03 (第25図・写真25) 2間×2間の母屋に庇をもつ。棟方向N38° E。梁行長390cm・桁行長400cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、15~30cm・深さ20~30cmである。建物南面から150cmに庇が位置する。遺構面の削平が著しく、柱穴の残存状況は悪い。柱穴からの遺物が検出されていないが、4地区SB05-Bと方向性が等しいことから11世紀後半ないし12世紀の建物と考えられる。

5 地区SB02 (第26図・写真26) 2間×3間の建物である。棟方向N14° E。梁行長425cm・桁行長700cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径36~48cm・深さ24~40cmである。時期を比定できる遺物は検出されなかったが、5地区SB01と方向性が等しいことから、11世紀の建物と考えられる。

4 地区SB14 (第27図・写真26) 2間×3間の建物である。棟方向N30° E。梁行長430cm・桁行長730cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径24~40cm・深さ25~40cmである。SP178より遺物が検出された。(第28図・写真29) 18は、土師器杯。底部切り離しは糸切り。内面底部に指頭圧痕を有する。11後半から12世紀に比定できる。

4 地区SB15 (第29図・写真28) 4地区SB14に隣接する2間×3間の建物である。棟方向N30° E。梁行長340cm・桁行長750cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径20~40cm・深さ20~40cmである。SP25より、時期を比定できる遺物が検出された(第30図・写真30)。19は、土師器皿である。底部に糸切り痕を有する。20は、土師器碗である。底部外面切り離しは糸切り。高台張り付け。12世紀に比定できる。

5 地区SB11 (第31図・写真31) 2間×3間の建物で、周囲に塀又は柵をもつ。総柱の建物の可能性もある。母屋の棟方向N38° W。梁方向480cm・桁方向560cmを測る。建物を構成する柱穴の規模、径10~56cm・深さ16~50cmである。敷地面積は約92㎡であり、建物面積は34㎡である。平安時代後期の建物と考えられるが、周囲に塀又は柵を有する形態としては特異だと言える。SP56・SP57より時

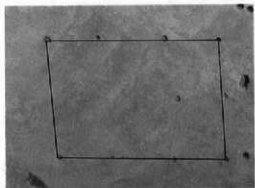


写真25 4地区SB03全景

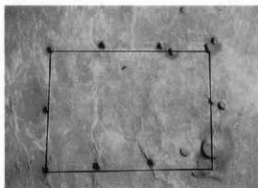


写真26 5地区SB02全景

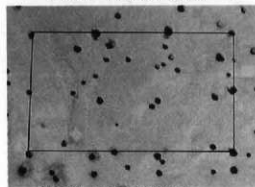


写真27 4地区SB13全景

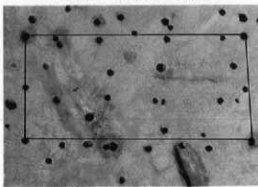
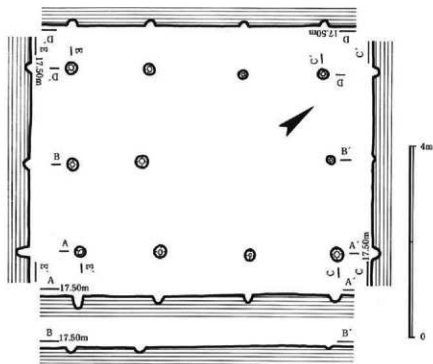


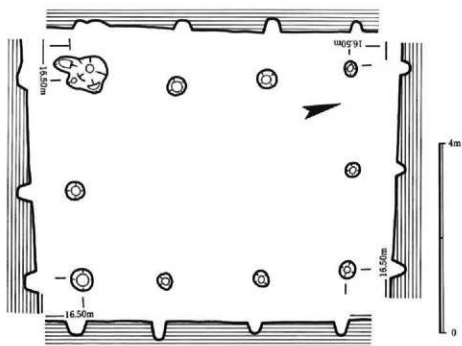
写真28 4地区SB15全景

期を比定できる遺物が検出された（第32図・写真32）。21は土師器皿である。底部切り離しは糸切りであり、板目圧痕が残る。内面底部には、指頭圧痕が確認される。SP56より出土。22は、土師器碗である。ミズビキで、底部切り離しは糸切り。高台は貼り付け。SP57より出土。それぞれ11世紀後半の遺物と考えられる。また、5地区SB10と方向性が等しいことからSB11は、同時期の建物と言える。

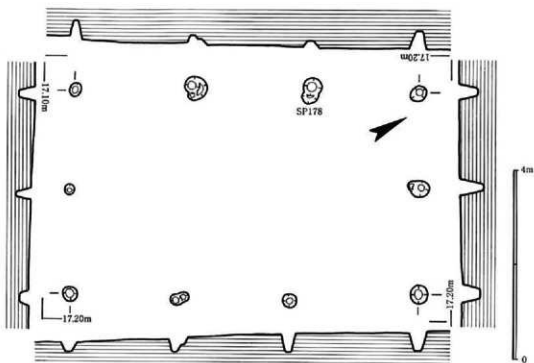
4地区SB04（第33図・写真33） 2間×2間の建物である。北東の面中央の柱穴は、遺構面の削平が著しく、確認することができなかった。棟方向N58°W。梁行長410cm・桁行長520cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径24~40cm・深さ10~25cmである。それぞれの柱穴からは時期を比定できる。



第25図 4地区SB03実測図



第26図 5地区SB02実測図



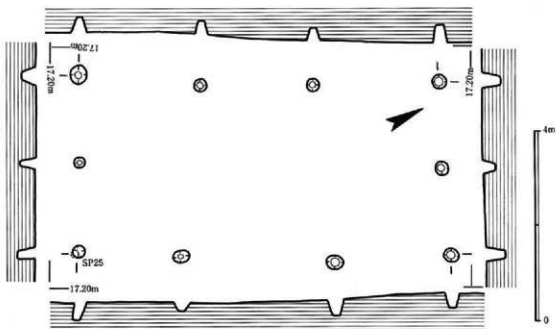
第27图 4地区SB14实测图



第28图 SB14関連遺物実測図



写真29 SB14関連遺物



第29图 4地区SB15实测图



第30图 SB15関連遺物実測図

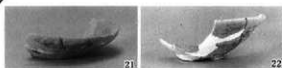


写真30 SB15関連遺物

だけの遺物は検出されなかったが、4地区SB14の方向性が等しいことから11世紀後半から12世紀と比定できる。

4地区SB01（第34図・写真34） 2間×2間の縁柱建物である。棟方向N46° W。梁行長390cm・桁長440cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径20～36cm・深さ20～36cmである。SP02より遺物が検出された（第35図・写真41）。25は、土師器皿である。底部切り離しは糸切り。24は、土師器皿である。内面底部は指頭圧痕を有する。底部切り離しは糸切りで、板目圧痕が確認できる。11世紀～12世紀に比定できる。

5地区SB07（第36図・写真35） 2間×2間の建物である。建物北面中央の柱穴は、確認できなかった。建物の棟方向N75° W。梁行長440cm・桁行長585cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径24～44cm・深さ16～56cmである。それぞれの柱穴からの遺物は検出されなかったが、5地区SB01の方向性が等しいことから、5地区SB07は、同時期の建物と比定できる。

5地区SB03（第37図・写真36） 2間×2間の建物である。建物北面の柱穴は確認できなかった。建物の棟方向N30° E。梁行長420cm・桁行長460cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径20～40cm・深さ18～35cmである。いずれの柱穴からも遺物は、検出されなかった。

5地区SB05（第38図・写真37） 北西面の削平が著しく、柱穴が確認できなかった部分があり推定ではあるが、1間×2間以上の建物であったと考えられる。棟方向N39° E。推定梁行長430cm・桁行長560cmを測る。柱穴からの遺物は検出されていない。ただ、5地区SB-06と方向性が等しいので、同時期の建物だと言える。11世紀後半から12世紀に比定できる。また、5地区SB06・SD01と同一の方向性をもつため、工房の可能性もある。

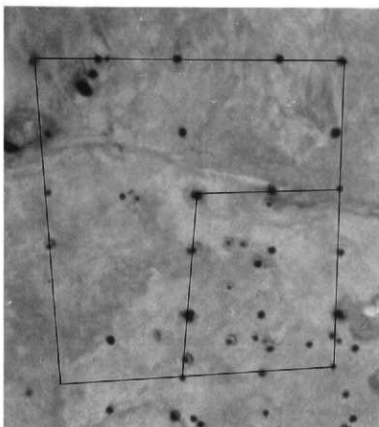
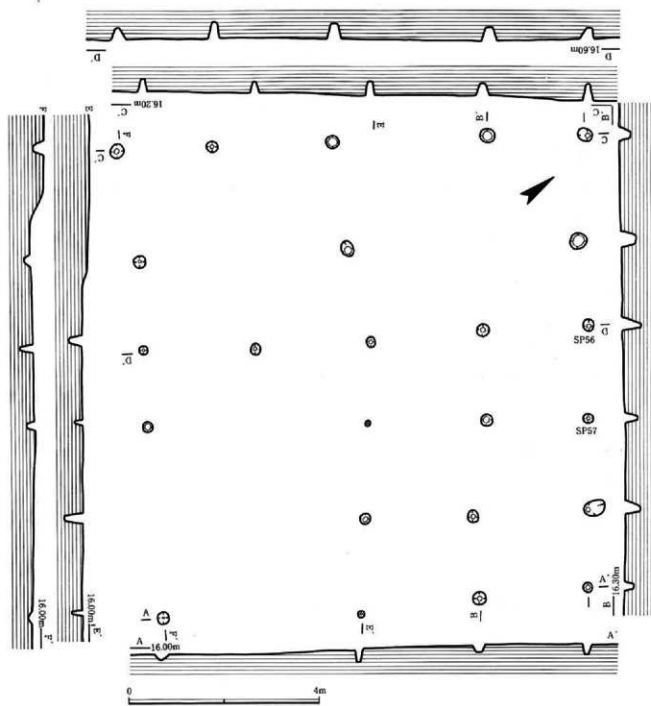
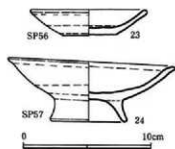


写真31 5地区SB11全景



第31图 5地区SB11实测图



第32图 SB11関連遺物実測図

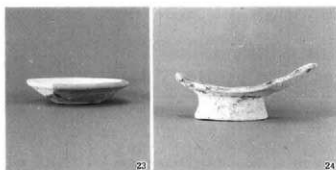


写真32 SB11関連遺物

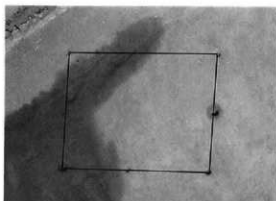


写真33 4地区SB04全景

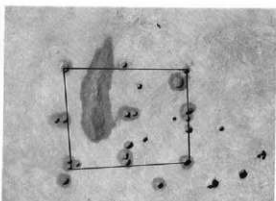


写真34 4地区SB01全景

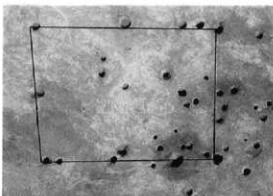


写真35 5地区SB07全景

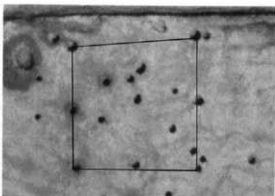


写真36 5地区SB03全景

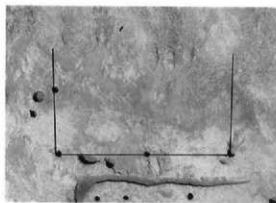


写真37 5地区SB05全景

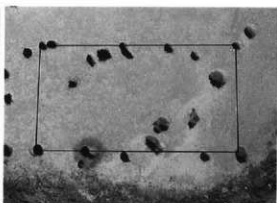


写真38 4地区SB09全景

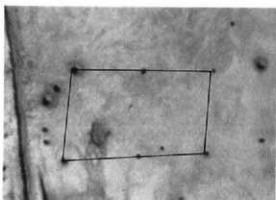


写真39 5地区SB04全景

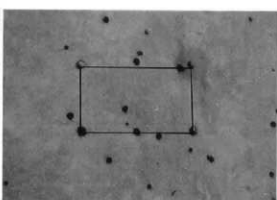
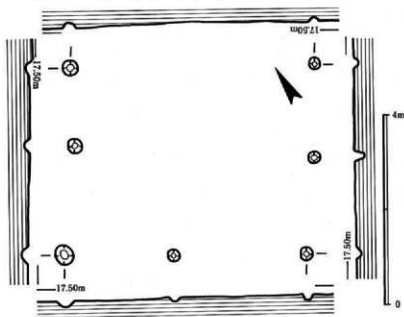
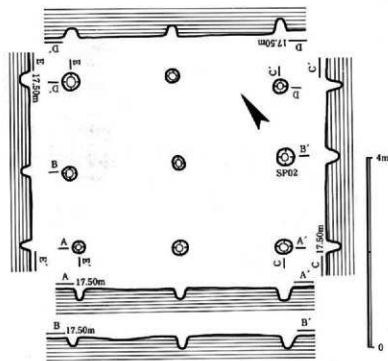


写真40 4地区SB06全景



第33図 4地区SB04実測図



第34図 4地区SB01実測図



第35図 SB01関連遺物実測図

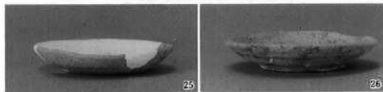


写真41 SB01関連遺物

4地区SB09 (第39図・写真38)

1間×2間の母屋と北東面に庇をもつ建物である。棟方向N45° E。梁行長425cm・桁行長250cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径25~32cm・深さ45~50cmである。柱穴より時期を比定できる遺物は出土していないが、4地区SB10と棟方向が等しいことから、12世紀の建物と考えられる。

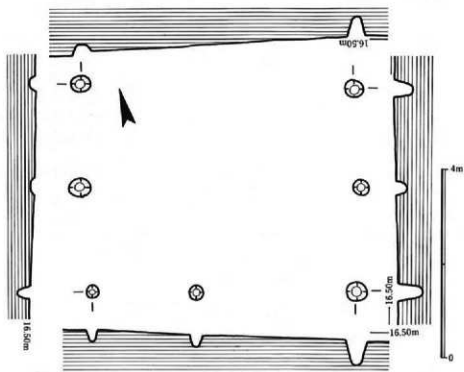
5地区SB04 (第40図・写真39)

1間×2間の建物である。棟方向N36° E。梁行長280cm・桁行長480cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径16~30cm・深さ20~32cmである。時期を比定できる遺物は出土していない。

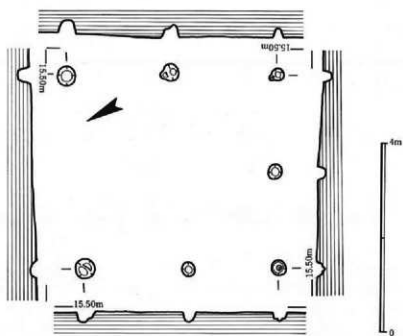
4地区SB06 (第41図・写真40)

4地区の西側、4-SB05の南4mの所に位置し、1間×2間の建物である。棟方向N22° E。梁行長265cm・桁行長440cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径36~40cm・深さ25~50cmである。

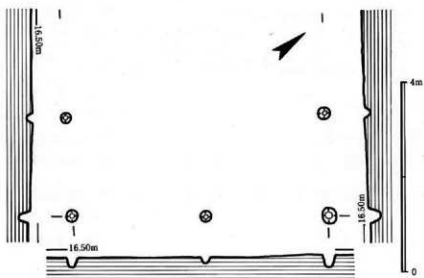
SP210・SP234から建物の時期を推定できる遺物が検出された(第42図・写真42)。28は、瓦質土器摺鉢である。備目は8本を単位とする。内底部にも備目が施されている。外面底部に板目圧痕が確認できる。体部外面には指頭圧痕が顕著である。SP234より出土。27は瓦質土器足輪の脚である。SP210より出土。いずれも15~16世紀の遺物と推定できる。



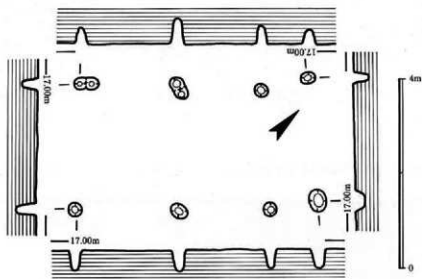
第36图 5地区SB07夹测图



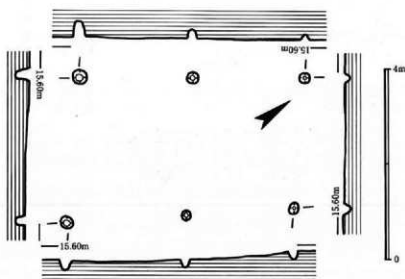
第37图 5地区SB03夹测图



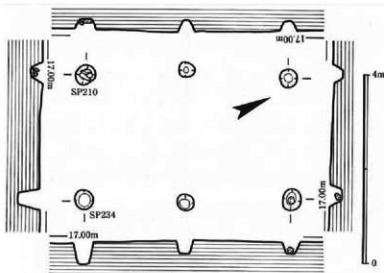
第38图 5地区SB05实测图



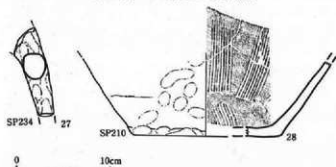
第39图 4地区SB09实测图



第40图 5地区SB04实测图



第41図 4地区SB06実測図



第42図 SB06関連遺物実測図

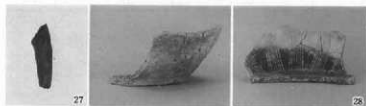


写真42 SB06関連遺物

4地区SB16(第43図・写真43) 1間×2間の母屋に底をもつ。建物東面中央の柱穴は確認できなかった。建物の棟方向N46°W。梁行長265cm・桁行長460cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径32~56cm・深さ32~60cmである。建物の底を構成する柱穴の規模は、径44~56cm・深さ48~56cmである。SP13・SP21・SP69・SP126より建物の時期を比定できる遺物が検出された(第44図・写真46)。34は、同安窯系青磁碗である。見込みに劃花紋を施文。35は、同安窯系青磁碗である。見込みに劃花紋を施文。体部外面は、へら削り。高台は削り出しである。いずれもSP13より出土。31は、土師器皿。底部切り離しは糸切り。32は、土師器環である。底部切り離しは糸切りである。33は、土師器環である。底部切り離しは糸切りである。それぞれSP21より出土。30は土師器皿である。SP126より出土。それぞれの遺物は12世紀後半から13世紀に比定できる。

5地区SB06(第45図・写真45) 2間×3間の総柱の建物である。棟方向N39°E。梁行長320cm・桁行長890cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、径12~50cm・深さ25~50cmである。建物の中心より南東側へ1.6m地点に炉跡(5-SX01・02)が検出された(P52第72図・写真69参照)。床面の削平が著しく、炉底を僅かに残す程度であった。建物の西面から南西面にかけてL字状の溝(5地区SD01)が付随している。この溝は、深さ12~20cm・幅16~30cmである。炉の周辺を巡っていることから、排水と同時に炉が設置された建物床面の防湿気と考えられる。

SD01から、轆の羽口・スラグ・土師器皿が検出された(第46図・第47図・写真47・写真48)。遺物の出土状況は、轆の羽口・スラグ・土師器皿が一カ所にまとまっている。廃棄されたというより、置かれた状態である。このことから、鍛冶又は精錬に関連する祭祀が行われたものと考えられる。また、轆の羽口について興味深いのは、羽口の胎土中に粉が混入されていることである。昨年度の調査で検出されたルツゴに多量の粉が混入されていた。本遺跡より北西へ4.5kmにある東禅寺・黒山遺跡から

出土のルツボ・鑪の羽口にも芻が混入されており、美東町長登銅山跡から出土する鑪の羽口にも芻が混入されているようである。

炉からの熱を羽口やルツボに伝導させにくくするために、混入したとの考えが一般的であるが、鍛冶や精錬を行う際の祭祀として、芻を混入した可能性も指摘したい。 建物を構成する柱穴SP34より

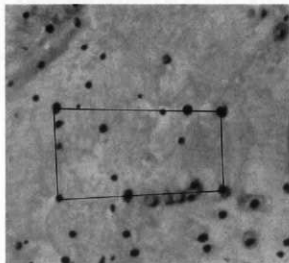


写真43 4地区SB16全景

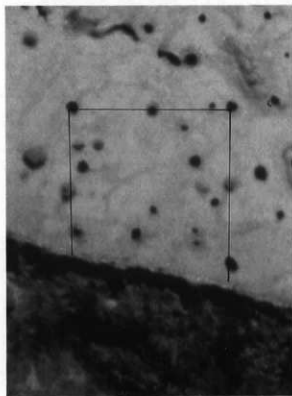


写真44 4地区SB11全景

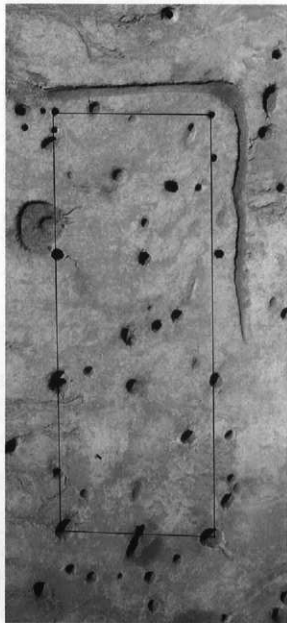
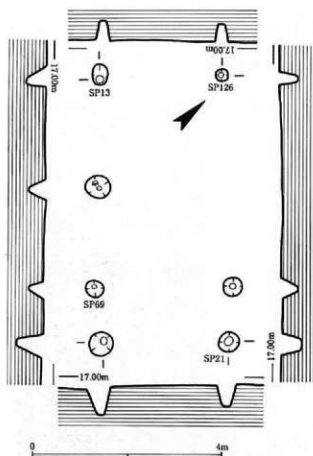
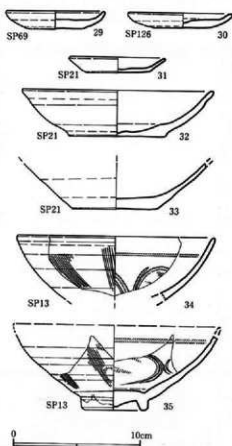


写真45 5地区SB06全景

時期を比定できる遺物が検出された（第47図・写真48）。34は、土師器碗であり、11世紀～12世紀と比定できる。建物と溝の時期に矛盾がなく、いずれも冶金関連のであることから、5地区SB06は11世紀～12世紀における、金属加工に関する工房跡と考えられる。



第43図 4地区SB16実測図



第44図 SB16関連遺物実測図

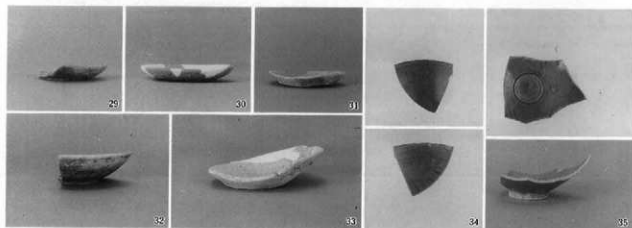
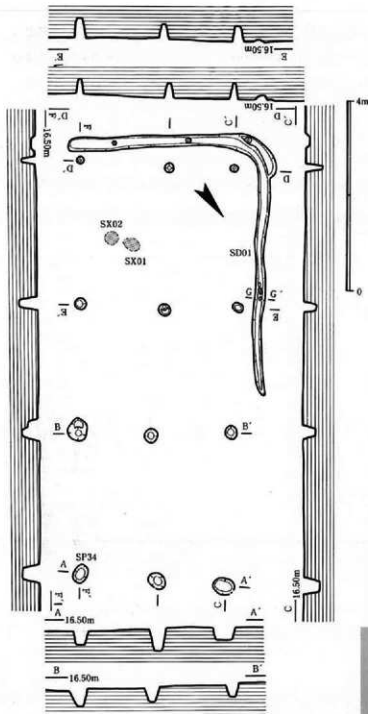
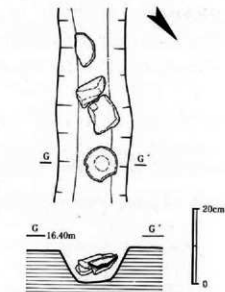


写真46 SB16関連遺物



第45图 5地区SB06・SD01実測図



第46图 SD01遺物出土状況実測図

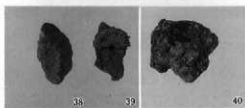
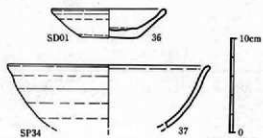


写真47 SD01遺物出土状況



第47图 SB06・SD01関連遺物実測図

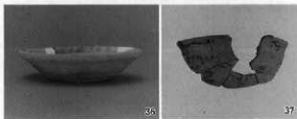
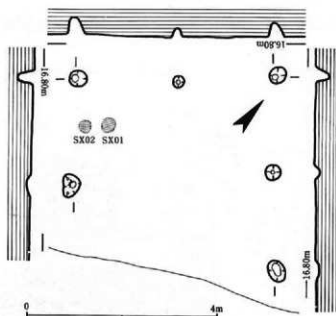


写真48 SB06・SD01関連遺物

4地区SB11（第48図・写真44）2間×2間以上の建物で、棟方向N39° E。梁行長430cmを測る。建物を構成する柱穴の規模は、推定で径20～50cm・深さ12～50cmと考えられる。建物の西面北寄りに炉跡SX01・02が検出された（P52 第72図・写真69参照）。建物を構成する柱穴や炉跡から時期比定できる遺物が検出されていないが、この炉が4地区SB-11の付帯施設であったと考え、金属加工に関する工房跡と考える。また、4地区SB09・10と方向性が等しいことから同時期の建物と考えられ、4地区SB11・SX01・SX02は12世紀のものと考えられる。



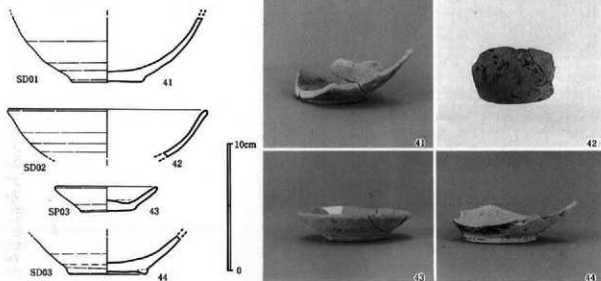
第48図 4地区SB11実測図

(2) 4・5地区の溝状遺構と遺物

溝状遺構は、4・5地区で、合計7条が検出された。地区ごとでは、4地区4条、5地区2条で長さは3～11m・幅20～70cm・深さ2～19cmの規模である。掘立柱建物跡と関係のある溝状遺構が多い。

4地区の溝状遺構は、4条が全て北東に集中し、比較的浅く短く、4条とも北東から南西に延びる。SD01はSB12と、SD04はSB10と、それぞれ主軸方位がほぼ同じである。SD02・SD03とSB07も、それぞれ主軸方位をほぼ同じとし、2条の溝状遺構がSB07を挟むように存在している。4地区の溝状遺構は、掘立柱建物跡に伴う可能性がある。遺物については、どの溝状遺構からも中世の土師器類が出土した。

5地区の溝状遺構については、2条とも10m以上の長さがあり、本調査区では長い方である。また、これらの溝状遺構の近くには掘立柱建物跡が存在する。



第49図 4地区SD01・SD02・SD03出土遺物実測図

写真49 SD01・SD02・SD03出土遺物

4地区SD01（第6図・写真7）SB13西側に位置する。検出部分の長さ約5m、幅45～60cm、深さ5～8cmを測り、全体的に浅い溝状遺構である。底部は、凹凸があり、断面は逆台形になっている。11世紀後半から12世紀の、土師器杯（37）以外に、土師器碗・皿などの遺物が出土したことから、中世の遺構だと考えられる。

4地区SD02（第10図・写真10）SBの西側に位置する。検出部分の長さ約3m、幅40～50cm、深さ8～12cmを測る。全体が浅く、底部にはやや凹凸がある。断面は、逆台形である。遺物は、12世紀の土師器片が出土した。38は、土師器碗である。

4地区SD03（第10図・写真10）SB07の東側に位置する。検出部分の長さは、西から東へ約3m、そこから約90度湾曲し、7m南へ延びる。厳密には2条の溝である。幅40～70cm、深さ6～19cmを測る。やや浅い溝状遺構で、底部は多少の凹凸があ。断面は逆台形になっている。12世紀の土師器片・白磁片が出土した。38は、土師器皿である。

4地区SD04（第8図・写真9）SB10の西側に位置する。検出部分の長さは、全長約11mになる。西端では、SB12に沿うように南へ折れる。深さは幅20～40cm、深さ2～6cmであり、SD01～03と比

して幅が狭いのが特徴である。底部は、やや凹凸があり、断面は、U字型ないし逆台形になっている。12世紀の土師器片・須恵器片・白磁片が出土した。40は、土師器碗である。

5 地区SD01 工房SB06に、伴う溝である。(27ページを参照)

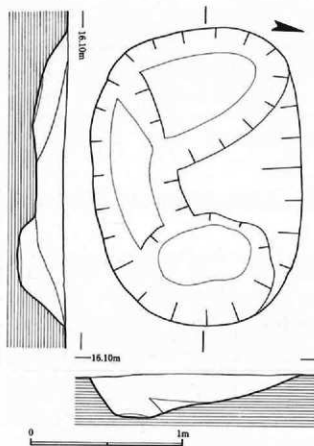
5 地区SD02 北部東側に位置する。検出部分の長さは、約11m、幅24~80cm、深さ4~12cm底部はやや凹凸があり、底部はU字型ないし逆台形になっている。SD02はSB11の南方に約2mの地点から始まり、包含層谷状地形北端に至る。SB11と、この溝状遺構との関係については不明である。

(3) 4・5地区の土坑と遺物

土坑は、4・5地区で計18基が確認された。内訳は、4地区で4基、5地区で14基である。平面形態は、長円形あるいは円形のものが11基、不整形が2基、方形が2基、溝状のものが3基である。溝状の土坑は全て4地区から検出されているが、どれも長軸が2m前後あり大型である。円形や不整形、溝状の土坑には大型のものが多く、土坑は全体的に浅いが、底部で60cmを測るものもある。出土遺物から古代から中世の土坑と考えられる。しかし、この地区は、遺物が少なかつたり小片だつたりして、時期の特定できない土坑が多い。

5 地区SK12 (第50図・写真50) SB06の東側に位置する。平面形が、200×140cmの、長円形で、深

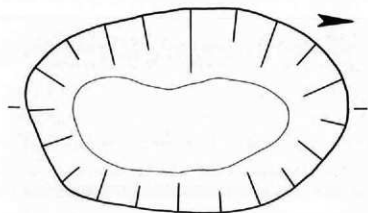
さが12~32cmの今回の調査では最大の土坑である。底面は、西から東へ傾斜して、東側の落ち込みの部分と切り合っている可能性がある。時期が特定できるような遺物は出土していない。



第50図 5地区SK12実測図



写真50 5地区SK12完掘(南より)

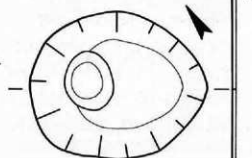


—16.00m



0 1m

第51图 5地区SK15实测图

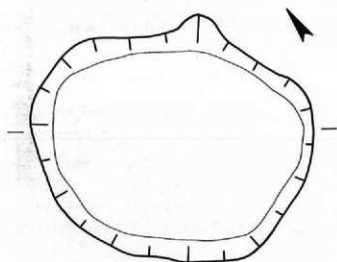


—15.30m



1m
0

第52图 5地区SK06实测图

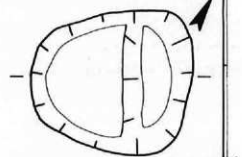


—15.50m



0 1m

第53图 5地区SK14实测图

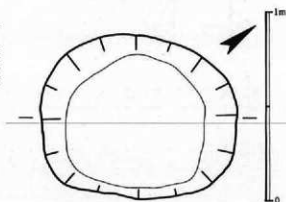


—16.30m



1m
0

第54图 5地区SK02实测图



—15.90m



1m
0

第55图 5地区SK11实测图

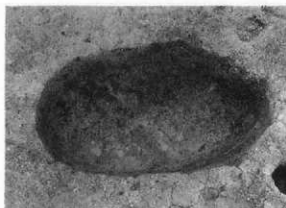


写真51 5地区SK15完掘(東より)



写真52 5地区SK06完掘(南より)



写真53 5地区SK14完掘(南より)



写真54 5地区SK02土層(南より)

5地区SK15(第51図・写真51) 北部中央付近に位置し、平面形が、174×110cmの長円形で、深さが37~40cmである。遺物は、16世紀の瓦質土器足銅片が出土した。SB11南側と位置するが、関連する遺構ではない。

5地区SK06(第52図・写真52) 南端に位置し、平面形は93×75cmの長円形で、深さが8~11cmである。土坑の底部には、中央部より北東寄りに直径31×26cm、深さは20~22cmの柱穴が掘り込まれている。時代が特定できるような遺物は出土していない。

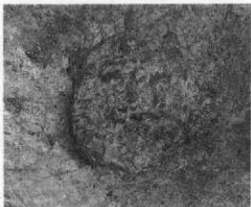


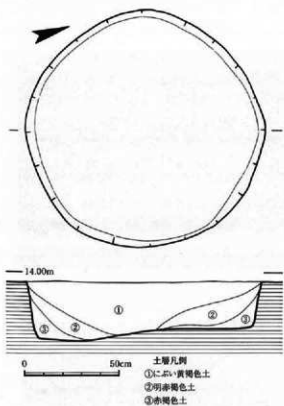
写真55 5地区SK11完掘(南より)

5地区SK14(第53図・写真53) 平面形は、148×120cmのほぼ長円形で、深さは11~12cmである。底部は、平坦。遺物は13世紀のものだと推定される土師器片・青磁片が出土した。

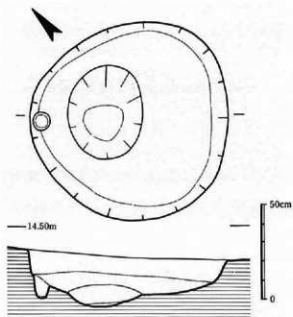
5地区SK02(第54図・写真54) 平面形が、直径86×75cmの長円形で、深さが21~41cmである。土坑の底面には付近に5cmほどの西側から東側への段落ちがある。時期が特定できる遺物は出土しなかった。

5地区SK11(第55図・写真55) 平面形は、103×87cmのほぼ長円形で、深さは5~10cmである。遺物は、土師器片が出土したが時期は特定できなかった。

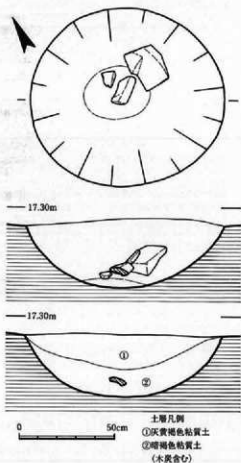
5地区SK04(第56図・写真56) 墓(ST01)に隣接するが関係は不明。平面形は、直径約120cmの円形で、深さは24~31cmである。底部はほぼ平坦で、北から南へ傾斜する。時期を特定できるような遺



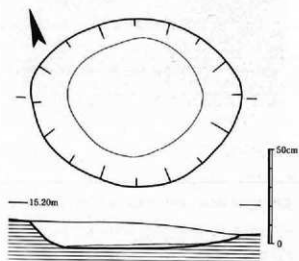
第56图 5地区SK04実測図



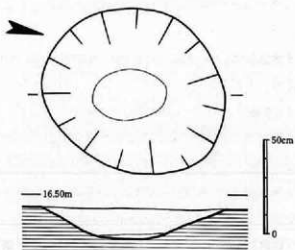
第57图 5地区SK13実測図



第58图 4地区SK18実測図



第59图 5地区SK07実測図



第60图 5地区SK09実測図



写真56 5地区SK04土層（東より）



写真57 5地区SK13完掘（東より）

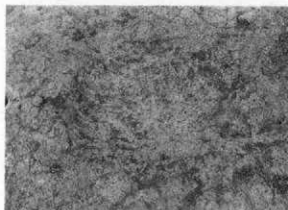


写真58 5地区SK09完掘（東より）

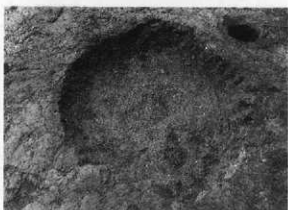


写真59 5地区SK07完掘（東より）

物は出土しなかった。

5地区SK13（第57図・写真57）平面形は、直径約120cmの円形で深さが12～18cmである。土坑の底部には、中心より北東寄りに直径48×39cm、深さが土坑の底部より12cm×8cmの柱穴が掘り込まれている。遺物は、12世紀から13世紀の土師器片が出土した。SB06とはほぼ同時期であるが、その関係は不明である。



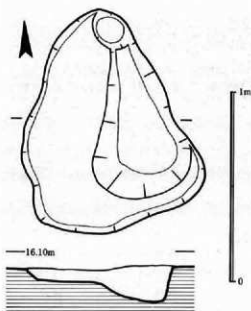
写真60 4地区SK18完掘（西より）

4地区SK18（第58図・写真58）調査区西端に位置する。平面形は、直径約100cmの円形で、深さが36cm、断面が碗状になった土坑である。埋土には、自然石や、炭化木を含んでいた。時期が特定できるような遺物は出土しなかった。

5地区SK07（第59図・写真59）調査区南、東端に位置し、SK10と並ぶ。平面形は、直径が90～110cmの円形で、深さが9～13cm、底部は平坦である。土坑の中央から西側部分の表面が、削平を受けていると思われる。時期を特定できるような遺物は出土しなかった。

5地区SK09（第60図・写真60）SB03の西側に位置する。平面形は、直径約90cmの円形で、深さが17cmの底部が湾曲した土坑である。時期を特定できるような遺物は出土しなかった。

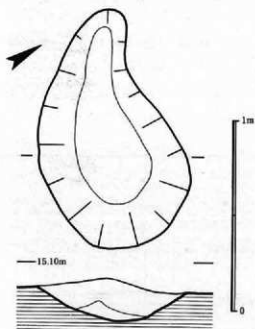
5地区SK03（第61図・写真61）長軸125cm・短軸95cmの不整形で、深さが7～15cmの土坑である。



第61図 5地区SK03実測図



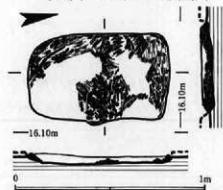
写真61 5地区SK03土層（南より）



第62図 5地区SK10実測図



写真62 5地区SK10土層（西より）



第63図 5地区SK01実測図



写真63 5地区SK01炭の出土状況（南より）

北側の端部が柱穴に切られている。時期が特定できるような遺物は出土しなかった。

5 地区SK10 (第62図・写真62) 調査区南、東端に位置し、SK07と並ぶ。長軸126cm・最大幅80cmの不整形で、深さが16~19cmの土坑である。遺物は、12世紀から13世紀にかけての、土師器片が出土したことから、中世の土坑と考えられる。

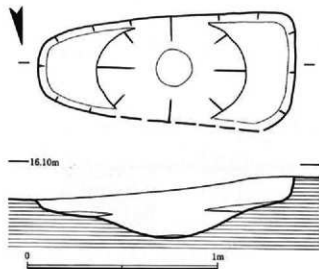
5 地区SK01 (第63図・写真63) 平面形は、長辺71cm・短辺45cmの隅丸方形で、深さが25~35cmの土坑である。壁面全体が、熱を受けて赤く変色している。底真上から、木炭と焼土が、厚さ約1cmにわたり遺構の全面から検出されたが、残存状態が悪く用途は不明である。時期が特定できるような遺物は出土しなかった。

5 地区SK08 (第64図・写真64) 平面形は、長辺134cm・最大幅61cmの隅丸方形で、深さが5~24cmの土坑である。この土坑の北側の部分が、ST01に切られている。時期が特定できるような遺物は出土しなかった。

4 地区SK16 (第65図) SB11の北から西側にかけてみられる。浅い落ち込みの一部の可能性がある。長軸202cm・最大幅60cmの溝状で、深さが9~12cmの土坑である。遺物は、11世紀と推定される土器片が出土した。SK16は、SB08・SB16と隣接する。SB08からの遺物の出土がないので関係は不明である。SB16は、12世紀から13世紀の遺物が出土していることから、SK16とSB16は関係の可能性は少ない。

4 地区SK01 (第66図) SD02とSD03間に挟まれ、SB07内に位置する。また、SB15・SB13・SB14が隣接するが、同一方向性を持たためこれに伴う可能性は少ない。長軸195cm・最大幅69cmの溝状で、深さが20~23cmの土坑である。遺物は土師器片が出土したが、時期の特定は不明である。

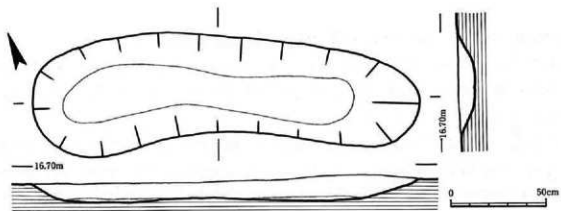
4 地区SK06 (第67図) SB16内に位置し、SB15・SB07・SB13・SB14・SB12に隣接する。5つの掘立柱建物跡とほぼ同一方向をもつため、これらに伴う可能性があるが、どれと関係があるか具縦的な特定はできない。軸192cm・最大幅60cmの溝状で、深さが5~13cmの土坑である。遺物は、12世紀の土師器片や45の甕片や46の碗片が出土した。45は土師質で、口縁部は「く」の字状に屈曲。外面はナデ調整で、内面はへら削り。46は土師質であるが、摩擦のため調整は不明である。



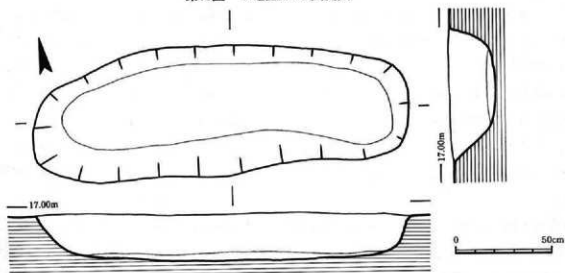
第64図 5地区SK08実測図



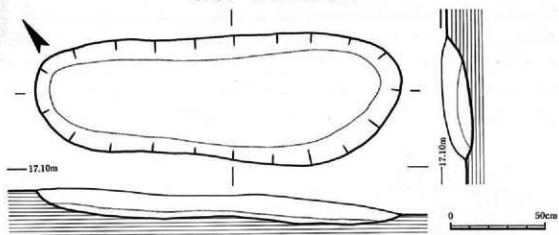
写真64 5地区SK08土層(北より)



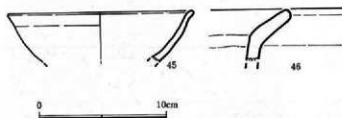
第65图 4地区SK16实测图



第66图 4地区SK01实测图



第67图 4地区SK06实测图



第68图 SK06出土遗物实测图

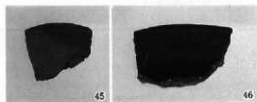
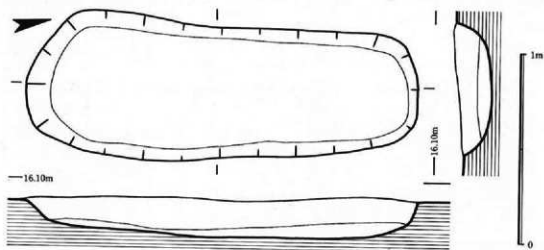


写真65 SK06出土遗物

(4) 埋葬遺構と遺物

埋葬遺構は、5地区で確認された木棺墓1基のみである。他には、墓の可能性をもつものは検出できなかった。

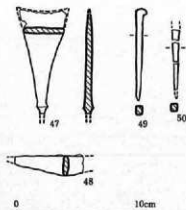
ST01 (第70図・写真66) 5地区南側中央付近で、SB02の南西に位置する。土坑墓は、長軸206cm・短軸70cmの隅丸長方形である。深さは10~19cmで、底部はほぼ平坦である。長軸方向は、N18° E。ST01SとB02は、ほぼ同方向で、近い位置にあり関連の可能性がある。SK08を切る。鉄製品が4点ほど遺構の北端部の東側の埋土の中から出土しただけで、他の遺物はなかった。鉄釘(49・50)が出土しているので、木棺墓と考えられる。50の鉄釘は、頭が折れている。48は、鉄刀子。47は鉄鎌で雁又鎌の系譜に沿った形状の遺物である。10世紀から12世紀の遺物だと推定される。



第69図 5地区ST01実測図



写真66 5地区ST01完掘(北より)



第70図 ST01出土遺物実測図

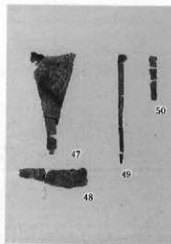


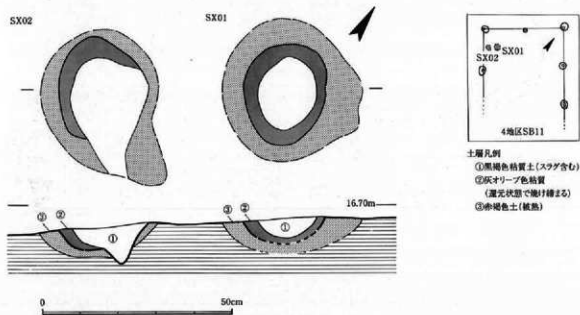
写真67 ST01出土遺物

(5) 4・5地区の炉跡と遺物

炉跡と考えられる遺構は4地区に2基、5地区に5基の計7基である。これ以外に炉床部の残存と考えられる焼け締まりが4地区に1か所認められる。基本的には製錬炉と考えられるが、鍛冶炉を含んでいる。なお、基本的にこれら炉跡からは年代を決定できる遺物がほとんど出土しなかった。

4地区SX01・SX02(第71図・写真68) 20cm足らずの距離をおいて隣接する炉跡であり、両者は規模・構造・被熱状況等においてほとんど差がない。この2基を覆うかたちで掘立柱建物(4地区SB11)が復元できたため、工房と推定した。なお、2基の炉跡は接近し過ぎているため、併存しないものと考えられる。いずれも、円形に近い平面形をもつ皿状のくぼみであり、炉床は還元状態で強く焼け締まる。炉内部にはスラグを含む黒色土が充満する。

4地区SX01は長径28cm・短径23cm・深さ6cmの規模をもち、固く焼け締まった炉床をよく残す。炉の周辺は被熱により最大径40cm程度の範囲で赤変が認められ、東側に湯口部分と推定される、赤変



第71図 4地区SX01・SX02実測図

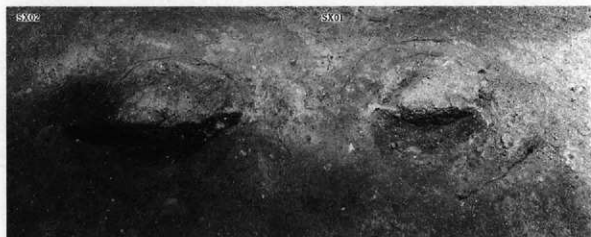
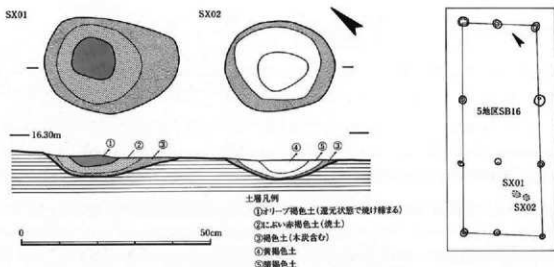


写真68 4地区SX01・SX02土層(南より)



第72図 5地区SX01・SX02実測図

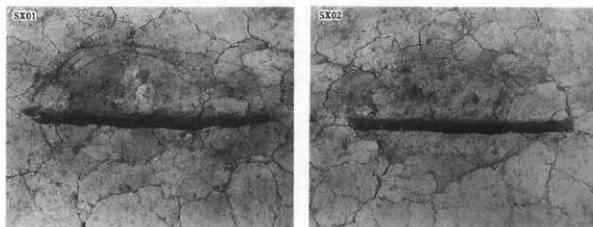


写真69 5地区SX01・SX02土層(西より)

4地区SX02は径20～25cm・深さ25cmの規模をもち、炉床は金属塊を取り出す際に破壊されたと考えられる。炉の周辺は被熱により最大径33cmの範囲で赤変が認められ、東側に湯口部分と推定される、赤変部分の突出が顕著に認められる。炉床付近の土を成分分析したところ、周辺の土壌に比して鉄を比較的多く含むことが明らかになった(付編参照)。

5地区SX01・SX02(第77図・写真69) 10cm余りの距離をおいて隣接する。この2基を覆うかたちで溝(5地区SD01)を伴う掘立柱建物(5地区SB06)が復元できたため、工房と推定した。建物を囲む溝からは土師器皿1とともに輪羽口片2・スラグ1が一括出土しており、炉跡・建物・溝が一連の遺構であることを示している。炉跡からは時代を推定できる資料は得られなかったものの、溝・柱穴から出土した土器により、11～12世紀の遺構と推定した(39ページ参照)。

5地区SX01は長径36cm・短径25cm・深さ7cmの浅い土坑の中央に、炉床とみられる還元状態の強い焼け締まりが直径12cmの範囲で残存する。焼け締まりの周辺は直径23cmの範囲で焼土が広がる。さらに、焼土の周辺には木炭片を含む褐色土が存在する。

5地区SX02は長径30cm・短径24cm・深さ5cmの浅い土坑に褐色基調の土が堆積するが、炉床を示す還元状態の焼け締まりおよび焼土は確認できない。

5地区SX03・SX04・SX05(第73図・写真70) 25cmないし30cmの距離をおいてほぼ直線上に並び、

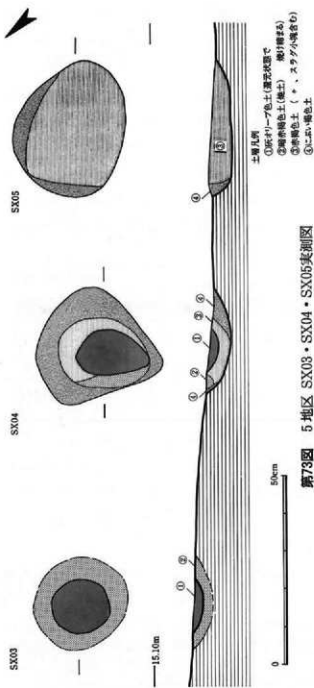


写真70 5地区 SX03・SX04・SX05土層(東より)

これらを覆うかたちで掘立柱建物を復元することはできなかった。5地区SX03・SX04では還元状態の強い焼け締まりが認められるが、焼け締まりの突出は認められない。5地区SX05には焼土が充満するのみで、還元状態の強い焼け締まりが認められないことから、前二者との明らかに異なる。

5地区SX03では炉床の底部が直径15cmの焼け締まりとして残存する。炉床は地面を掘りくぼめて粘土を貼って構築されており、その周囲は被熱のため直径25cm範囲で赤変が認められる。炉床土の一部を採取し、磁石によって選別したところ、土壌117g中3g(約3%)が磁性をもつ成分として得られた。

5地区SX04は浅い土坑を掘り込んだのちに炉床が構築される。炉床の底部は長径20cm・短径12cmの焼け締まりとして残存し、炉床の周囲には焼土がみられる。土坑は上部を掘削されており、本来は直径35cm程度の円形平面を呈していたと考えられる。埋土中には土師器細片・轆の羽口片・スラグなどが若干出土しており、土器の特徴から11～12世紀の年代が推定できる。埋土の一部を採取し、磁石によって選別したところ、土壌411g中120g(約29%)が磁性をもつ成分として得られた。同様に炉床土についても磁石によって選別したところ、土壌171g中3g(約2%)が磁性をもった成分として得られた。

5地区SX05は長径35cm・短径29cm・深さ6cm長円形の土坑に微細な鉄片を多く含む赤褐色土が充満していた。土坑の規模が近似すること、埋土に共通性がみられることから、5地区SX04同様に炉が本来存在した可能性も否定できない。埋土を採取し、磁石によって選別したところ、土壌中に約32%の割合で磁性をもつ成分が含まれることが明らかになった。なお、磁性をもつ成分の総量は307gである。

5地区SX03・SX04・SX05から採取された磁性をもった成分は具体的には、砂鉄および微細な鉄片・スラグから成るとみられる。比較のため別地点の柱穴埋土、遺構面を成す橙色粘質土、5地区遺物包含層の土壌と同様に磁石によって選別した。その結果、磁性をもった成分はおのおの0.05%、0.01%、0.008%の含有量にとどまることを確認できた。

(6) 4・5地区の柱穴と遺物

両地区合わせて約1100個の柱穴が確認された。このうち、埋土中に遺物を含んでいたものは約330個である。出土した遺物の中には、意図的に柱穴内に埋納または投棄された状況を示すものが比較的多く含まれていた。ここでは主な出土遺物について紹介するとともに、こうした状況を示す事例を紹介する。

4地区SP17(第74図・写真71) 特異な祭祀行為をうかがわせる事例である。この柱穴は埋土上位から、土師器脚付皿(22ページ参照)に載せられた状態で銅塊6点および鉄釘1点(57)が出土した(第75図・写真72)。銅塊にはいずれも糊が付着しており(写真73)、本来は初または稲穂が土師器脚付皿に載せられていたものと考えられる。なお、6点の銅塊は溶銅塊(51～55)と銅製品の廃材(56)の2種に分類できる。

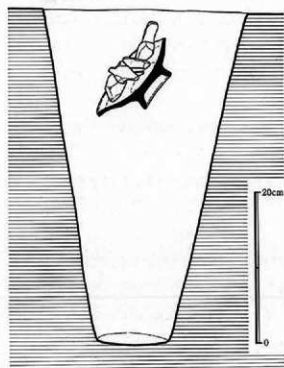
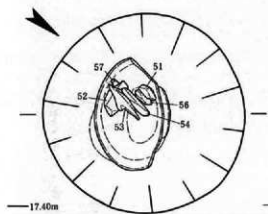
計測値は以下の通りである。

- 51 長さ5.4cm、最大幅2.5cm、最大厚0.9cm、重さ30.3g
- 52 長さ5.9cm、最大幅3.0cm、最大厚0.9cm、重さ22.2g
- 53 長さ6.5cm、最大幅2.3cm、最大厚0.8cm、重さ15.1g
- 54 長さ5.3cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cm、重さ13.9g
- 55 長さ3.0cm、最大幅0.9cm、最大厚0.5cm、重さ 2.4g
- 56 長さ4.1cm、最大幅2.9cm、最大厚1.1cm、重さ12.4g

51は一端(実測図上側)で折られており、成分分析を行なった結果、ヒ素を多く含む青銅であることが明らかになった(付編参照)。55はいわゆる銅滴である。56は厚さ0.3mm銅板を折り畳んだ部分と断面三角形の棒状の部分から成る。4地区SP17は明らかに掘立柱建物(4地区SB05A)の側柱のひとつであるから、4地区SB05Aを撤去し、4地区SB05Bに建て替えるまでの間に祭祀が行なわれたと考えられる。出土した土器は11世紀代に位置付けられるものである。

第76図は4地区の柱穴から出土した遺物である。58～66は共伴関係を確認できる資料、67～86はおのおの別個の柱穴から出土した遺物である。

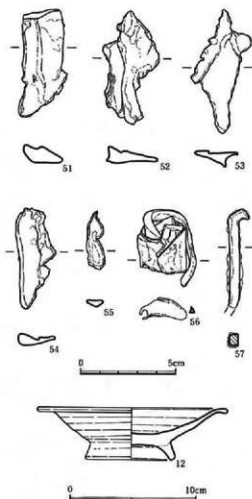
58～61は土師器皿3点と白磁碗の共伴資料である。皿の底部切り離しはいずれも回転糸切りである。62・63は大小の土師器皿の共伴資料である。63は12と同様の脚付皿と考えられるが、厚手の器壁が特異である。64～66は土師器皿と碗の共伴資料である。66は低い高台を貼り付



第74図 4地区SP17遺物出土状況



写真71 SP17遺物出土状況



第75図 SP17出土遺物実測図

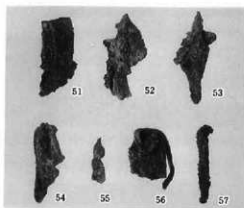


写真72 SP17出土遺物

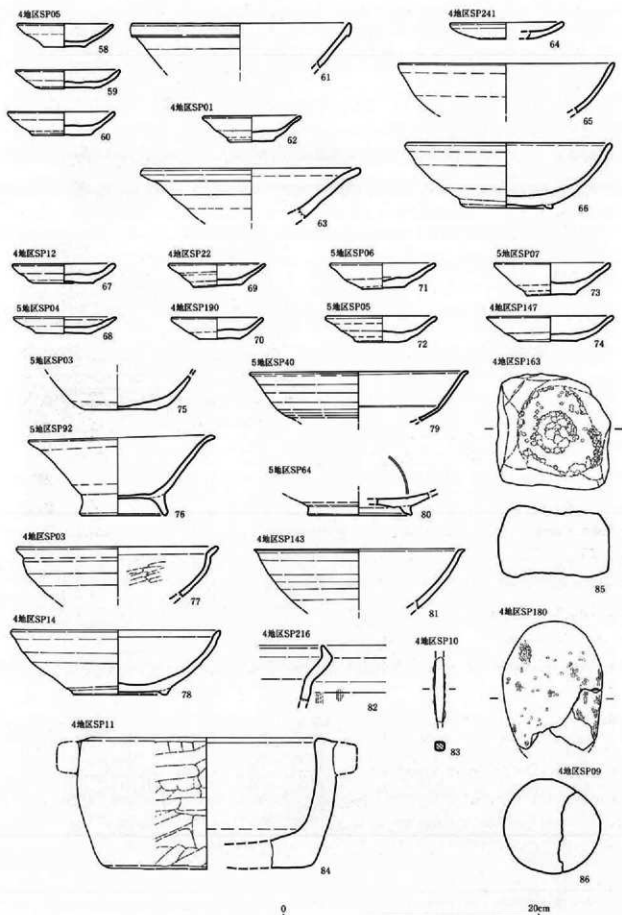


写真73 銅塊に付着した物(56の拡大)

ける。底部切り離しは不明である。67～74は土師器皿である。いずれも底部は糸切りである。22は底部外面に板目がみられる。75は口縁部を欠く土師器環である。胎土には砂粒を多く含み、底部はヘラ切りである。76～78は土師器碗である。76は胎土には砂粒を多く含み、底部切り離しは不明である。77・78は精良な胎土をもち、77は内面にヘラ磨きが施される。79・80は緑釉陶器碗である。いずれも胎土は須恵質であり、搬入品とみられる。81は白磁碗である。82は瓦質土器鍋である。83は鉄釘である。84は滑石製石鍋である。良質の石材を用い、器壁は厚い。縦方向の耳をもつとみられる。85・86は甲石である。86は別個の二柱穴（4地区SP09・4地区SP180）から出土した破片が接合した。

次に、遺物の出土状況に特徴のある柱穴を紹介する。

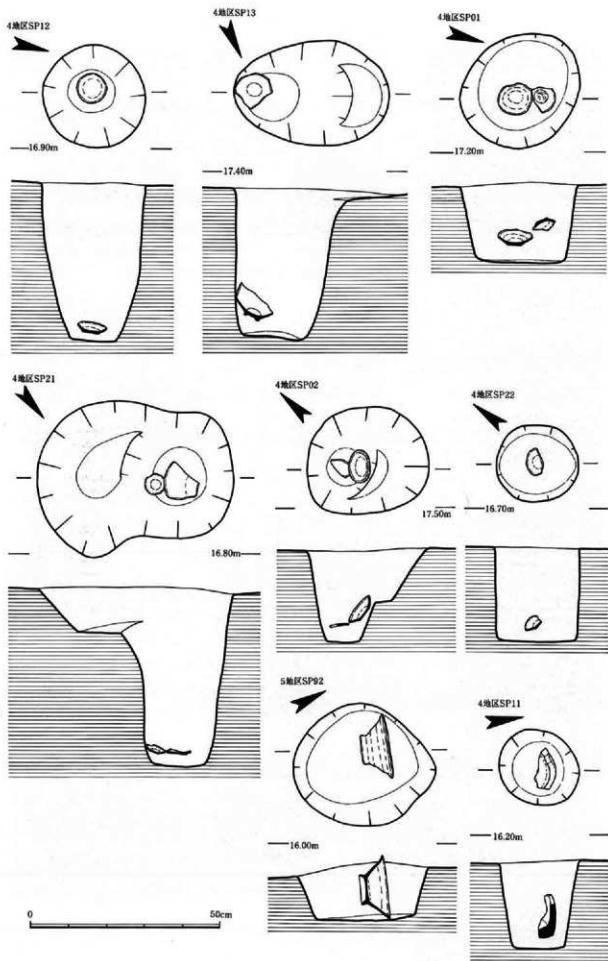
第77・78図、写真75・76は柱穴底面付近から、完形ないしそれに近い遺物が出土した例である。これらの柱穴をいずれも建物に伴うものとすれば、立柱以前に埋納されたものと理解できる。第78図下段は柱と柱穴の隙間を埋める際に埋土中に土器を埋納したと推定できる例である。これらに対し、第79図は建物の柱を抜き取った後、土器が埋納または投棄されたと考えられる例である。実際には第78図のいくつかもこの例に含まれる可能性がある。



第76图 4·5地区柱穴出土遗物实测图



写真74 4・5地区柱穴出土遺物



第77图 4·5地区柱穴遗物出土状况(1)

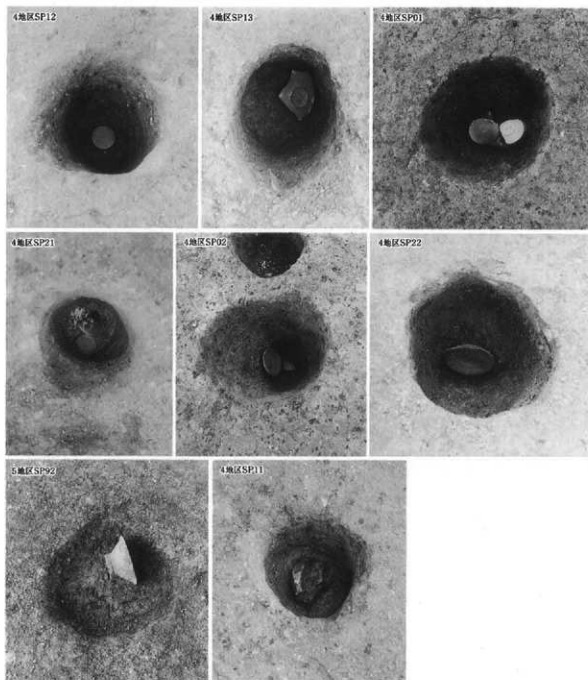
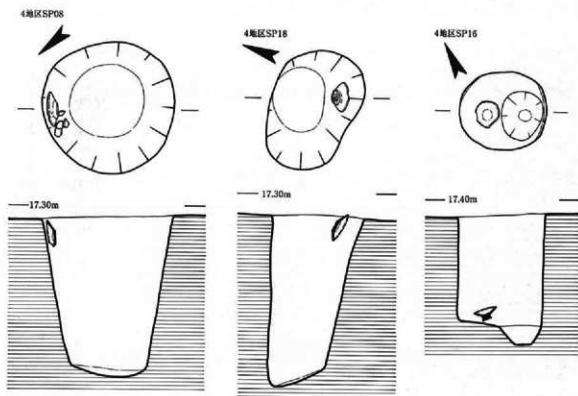
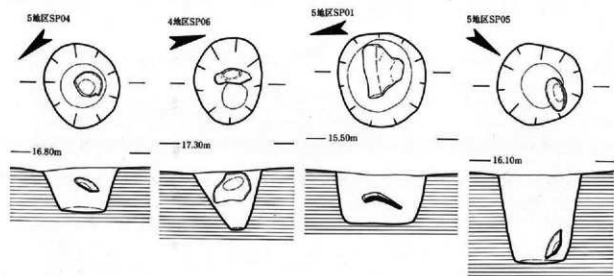
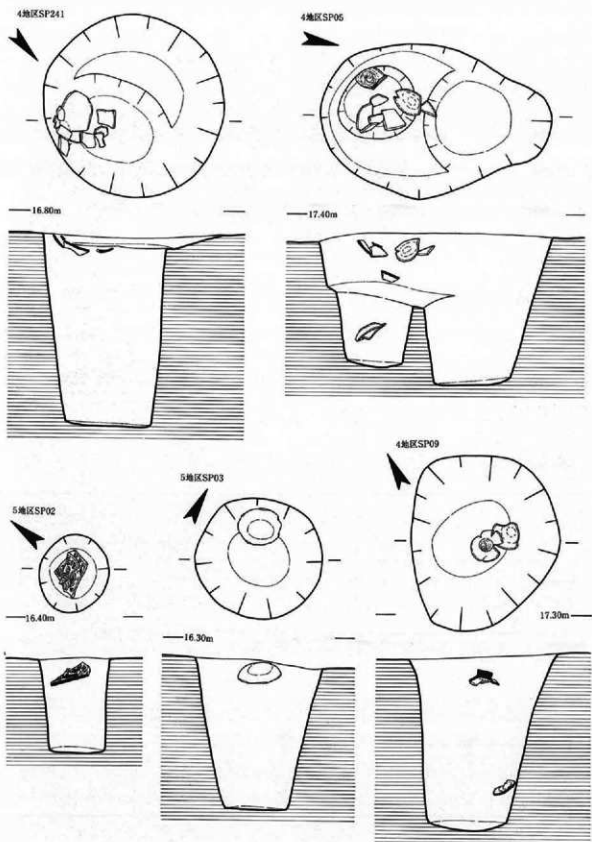


写真75 4・5地区柱穴遺物出土状況(1)



0 50cm

第78图 4·5地区柱穴遺物出土状況(2)



第79图 4・5地区柱穴遺物出土状況(3)

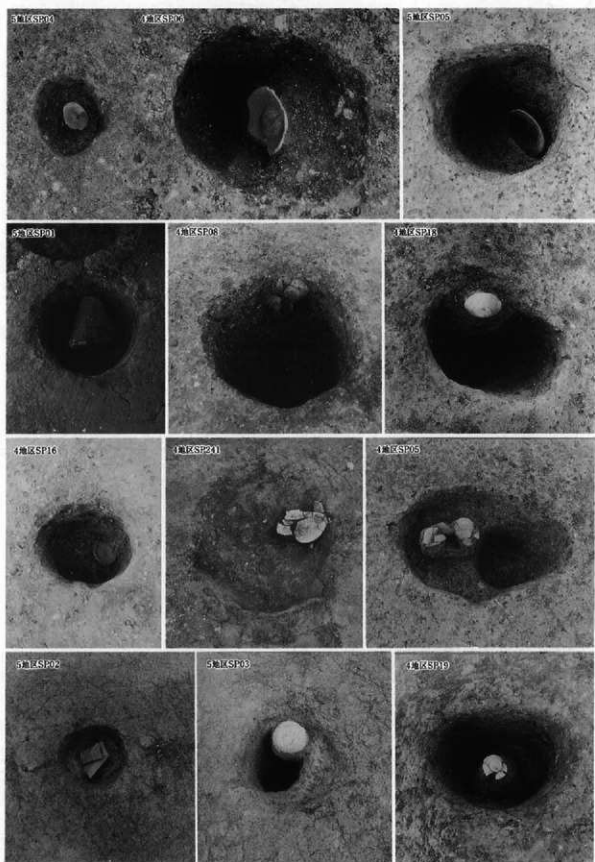
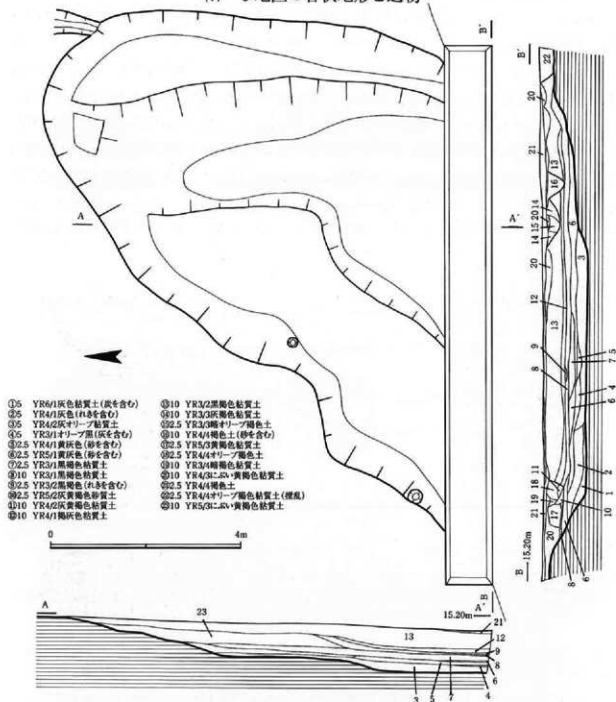


写真76 4・5地区柱穴遺物出土状況(2)

(7) 5地区の谷状地形と遺物



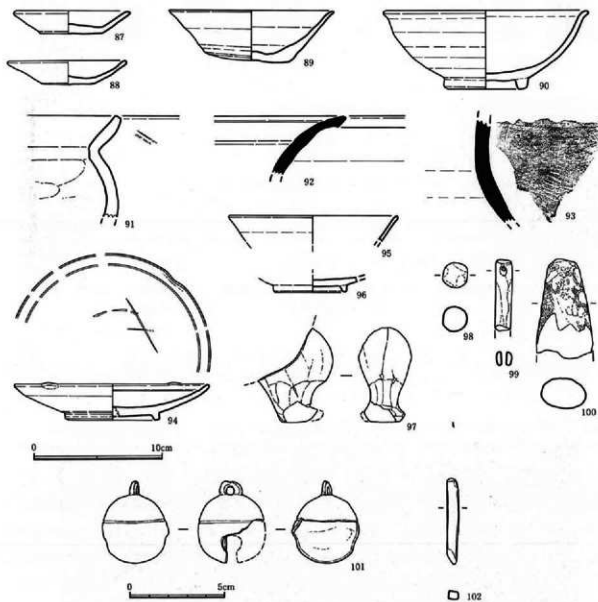
第80図 5地区の谷状地形実測図



写真77 5地区の谷状地形 (北より)

5地区の北東部に谷状の地形が確認された(写真5は谷状地形掘込み前に撮影)。底面は北から南へ傾斜しており、確認された長さは9.4mで、南端では幅約9m、深さ約1mである(第80図・写真77)。埋土からは、土器・陶磁器・スラグその他が出土した(第81図・写真78)。

87・88は土師器皿であり、いずれも底部には回転糸切り痕が残る。89は土師器坏である。底部には回転ヘラ糸切り痕が残る。90は土師器碗である。底部は回転糸切りののち高台を貼り付ける。91は土師器甕である。体部内面にはヘラ削りを施す。92は須恵器壺または甕の口縁部である。93は須恵器壺肩部である。外面には平行・格子目のタタキ目がみられる。搬入品の可能性が高い。94~97は緑釉陶器である。94は輪花皿である。胎土は須恵質であり、高台を削り出す。見込みにはヘラ記号と重ね焼き痕跡がみられる。95・96は軟質の椀である。96の高台は貼り付けである。97は三足器の脚部である。硬質で、外面全体にヘラ削り痕が残る。本来は球形に近い器に貼り付けられていたとみられる。98は



第81図 5地区の谷状地形出土遺物実測図

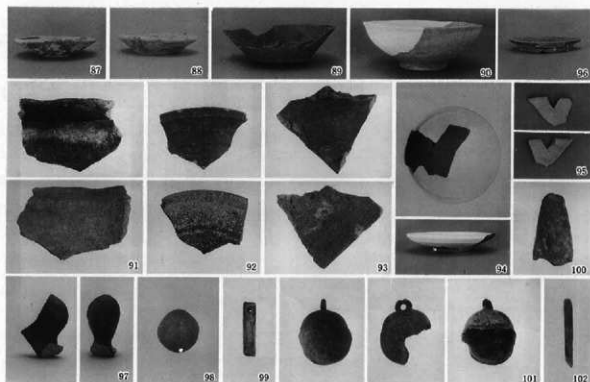


写真78 5地区の谷状地形出土遺物

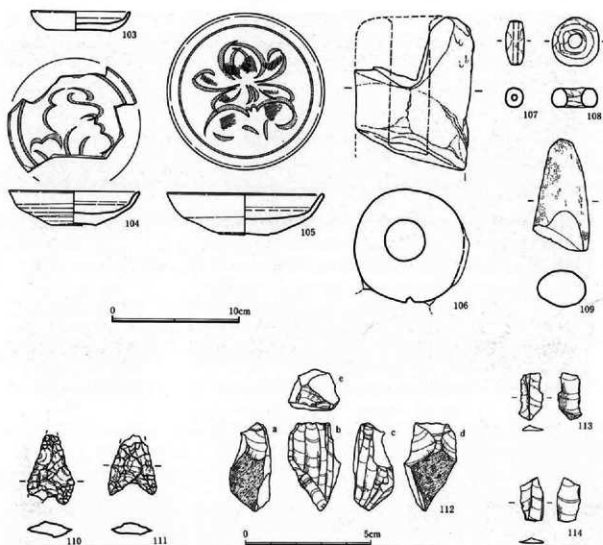
指頭圧痕を残す土師質の玉であり、孔をもたない。99は土師質の棒状土錘である。100は磨製石斧であり、ほぼ全面に叩打痕を残す。101は銅鈴である。高さ4.4cm・最大径3.5cm・重さ34.7gで、器壁は2～3mmである。成分分析を行なった結果、ヒ素および鉛を多く含む青銅であることが明らかになった（付編参照）。102は方柱状の銅製品である。長さ4.4cm・幅5～6mm・重さ8.0gである。成分分析を行なった結果、ほぼ純銅であることが明らかになった（付編参照）。

(8) 4・5地区の遺物包含層出土の遺物

4地区南端および5地区北東部では、遺物を多く含む黒色土が遺構面を覆っていた。この土層から出土した遺物のうち主なものを以下に紹介する（第82図・写真79）。

103は底部糸切りの土師器皿である。104・105は見込みに劃花文をもつ青磁皿である。106は甕の羽口である。先端部は溶融・発泡し、スラグが付着する。側面には、炉壁との接合部とみられる粘土帯が付着しており、炉壁に斜めに差し込まれていた可能性が高い。また、側面の溶融状況およびスラグの付着状況から、複数の羽口が連結して炉に装着されていた可能性がある。なお、胎土には粘土が多量に混入されている。107は土師質の管状土錘である。108は滑石製の紡錘車である。109は砂岩製の磨製石斧である。110は姫島産黒曜石製、111は安山岩製の打製石鏃である。

112は細石核である。長さ3.5cm、幅2.1cm、重量10.5gを計る。石材は西北九州産黒曜石と考えられる。石核成形は打面側からのみ行われており、下縁調整などは認められない。細石刃剥離の途中でd



第82図 4・5地区遺物包含層出土遺物実測図

面左部分が剥離されているが、石核の再形成を意図したものなのか、アクシデントによるものなのかは不明である。その後打面が再生され、作業面（b面）中央部の細石刃剥離が行われている。最終の剥離は作業面左下部に残されているもので、これはアクシデントによる可能性が大きい。細石刃の剥離が全周におよんでいるため素材の原形は不明だが、素材面が認められず、d面には自然面を残していることなどから燧素材であった可能性もある。形態は角錐形であり、いわゆる「野岳型」の細石核としてとらえられよう。

113は細石刃である。長さ1.9cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重量0.5gを計る。石材は西北九州産黒曜石であろう。背面は3枚の剥離面で構成され、上端部は切断されている。左側縁部に使用痕あり。

114も細石刃である。長さ1.7cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重量0.2gを計る。石材は西北九州産黒曜石と考えられる。背面は3枚の剥離面で構成され、上下両端部は切断されている。

以上のほかに、総重量は約7kgのスラグが出土している。このうち1点について成分分析を行ったところ、鉄を主成分とすることが明らかになった（付編参照）。

また、若干の緑釉陶器片（写真79 115～123）も出土している。

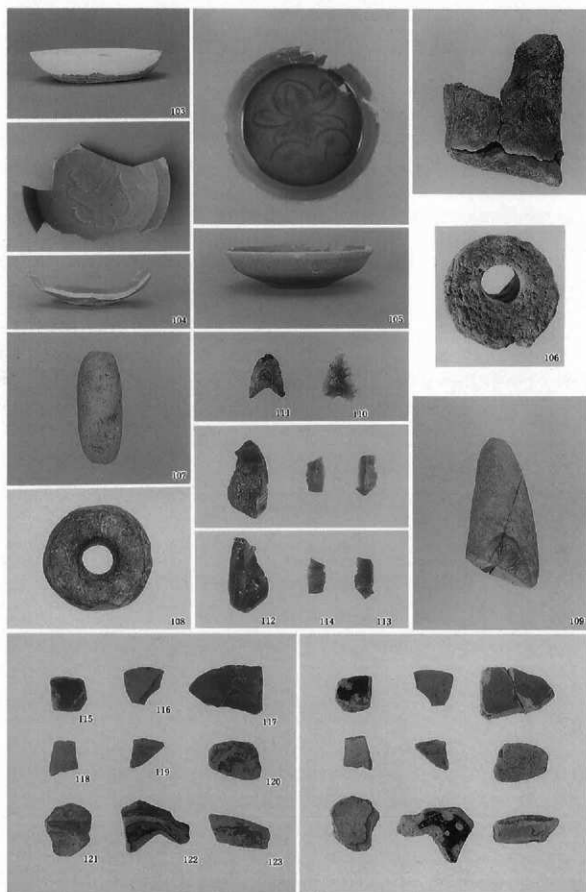


写真79 4・5地区遺物包含層出土遺物

(9) 6地区の建物跡と遺物

建物跡はすべてが掘立柱建物跡であり、6地区で11棟が復元された。復元に際しては、平面的な配置、柱穴の埋土、出土した遺物等を手がかりにした。年代は、11世紀から13世紀にかけての建物が中心で、2棟が15世紀ないし16世紀の建物である。詳しくはそれぞれの建物ごとの説明で述べることにする。6地区は全体的に調査区南端に柱穴が集中しており、そこから8棟が復元されている。長い期間に渡って人々が住んで生活していたと推察できる。南方向と西方向にさらに集落が広がると考えら

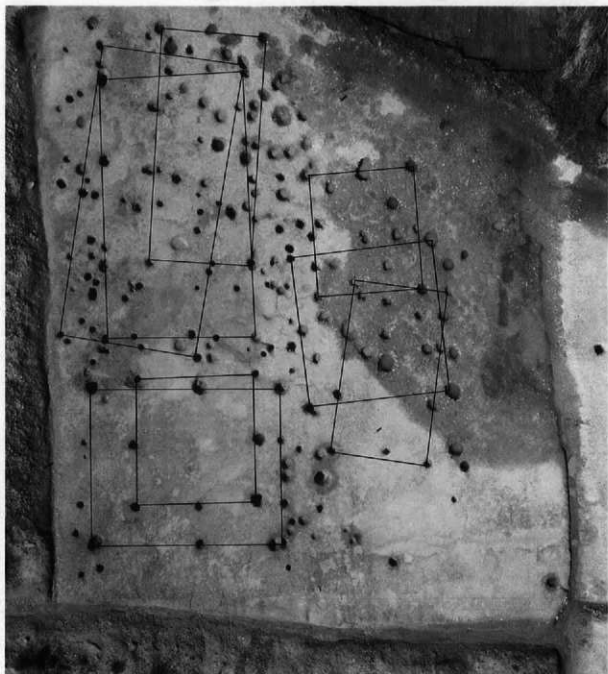


写真80 6地区掘立柱建物群 (SB04~SB11)

れる。一方、調査区北西側にはほとんど柱穴は確認されなかった。この地点は砂質と粘質の土が混ざり合っており、川底に堆積する石が多数出土していることから、川か溝が流れていたと考えられる。また、水田化される際に削平を受けたため、柱穴が確認できなかったものと考えられる。柱穴が集中していた南側であるが、水位が高く、居住条件としては決して恵まれているといえない地点で多数の柱穴や遺物を確認したことは、当時の居住地選定を考えていく上で大変興味深い。

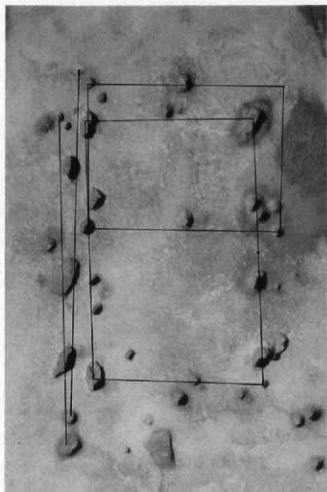


写真81 6地区SB01・SB02とSA01・SA02全景

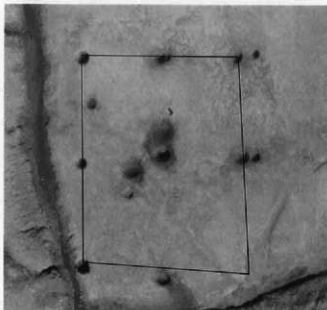
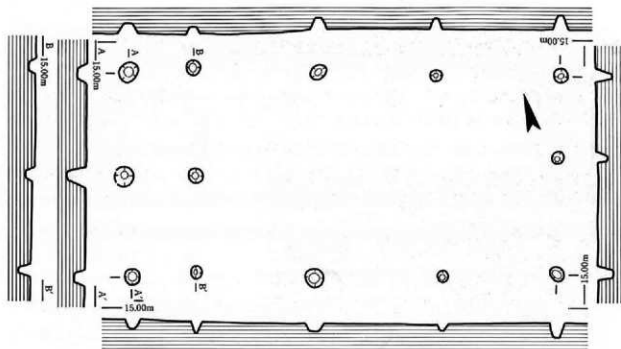


写真82 6地区SB03全景

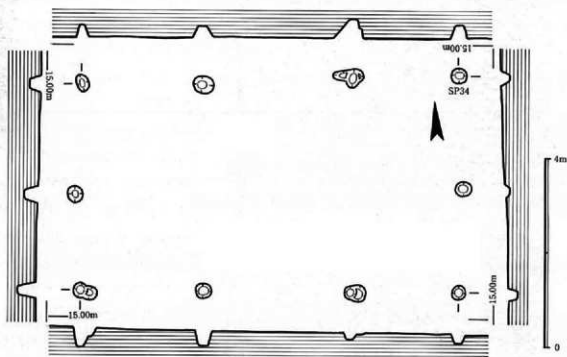
写真80は、6地区のSB04～SB11までの一帯を空中撮影したものである。写真右上部分が黒っぽく写っているのは、湧水のためである(写真の上方向が西)。

SB11(第83図 写真80) 6地区の南側に位置する庇付きの2間×3間の側柱の建物である。棟方向は、 $N75^{\circ}W$ 。SB04と同一の主軸方位をとる。梁行長409cm・桁行長908cmを測り、やや大型の建物である。西側に張り出した庇の長さは140cmである。柱穴から土師器片がいくつか確認されたが、建物の年代を特定するには至らなかった。また、SP09からは骨片が出土した。細片のため、動物の種類や時代を特定することは不可能であった。

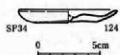
SB09(第84図 写真80) 6地区の南端にあり、SB11と重なり合うように位置している。2間×3間の側柱の建物である。棟方向は、 $N86^{\circ}W$ 。SB08とほぼ同一の方向性をとる。梁行長452cm・桁行長800cmを測る。SP34より土師器の皿(第85図・写真83)が出土している。口径7.7cm、底径4.7cm、器高1.0cmである。内面底部から外面までは回転ナデで調整し、底部は回転糸切りである。SB09は、11世紀ないし12世紀の建物と考えられる。



第83图 6地区SB11实测图



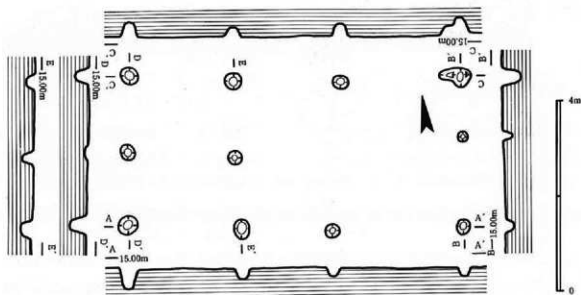
第84图 6地区SB09实测图



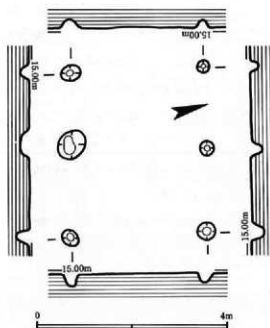
第85图 SB09関連遺物实测图



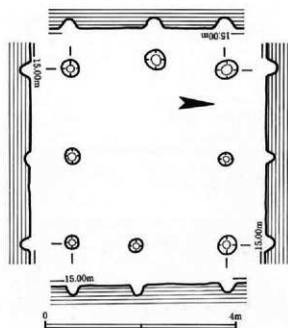
写真83 SB09関連遺物



第86図 6地区SB10実測図



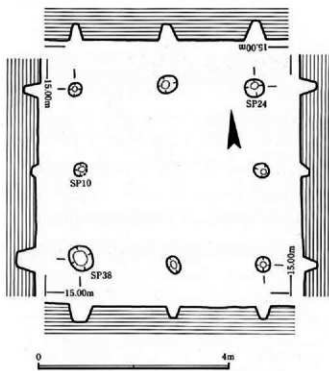
第87図 6地区SB04実測図



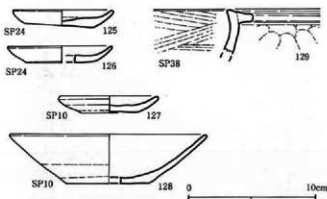
第88図 6地区SB06実測図

SB10 (第86図 写真80) SB09、SB11と重なり合うように位置する2間×3間の建物である。棟方向は、 $N83^{\circ}W$ 。梁行長320cm・桁行長712cmを測る。SB07とほぼ同一の主軸方向をとる。SB10は、11世紀ないし12世紀の建物と考えられる。

SB04 (87図 写真80) SB05に重なり合うように位置する1間×3間の縦長の建物である。棟方向は、 $N75^{\circ}W$ 。梁行長284cm・桁行長528cmを測る。2つの柱穴から土師器片が出土したが摩滅が激しく細片のため建物の年代は不明である。4m南方向に隣接する大型のSB11と同一の方向性をとることから、SB11が母屋でSB04が付属棟と考えることもできる。



第89図 6地区SB08実測図



第90図 SB08関連遺物実測図

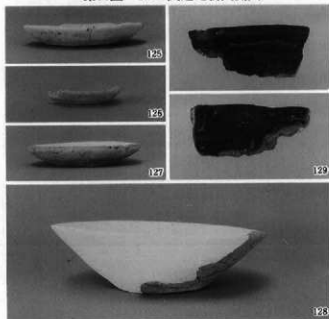


写真84 SB08関連遺物

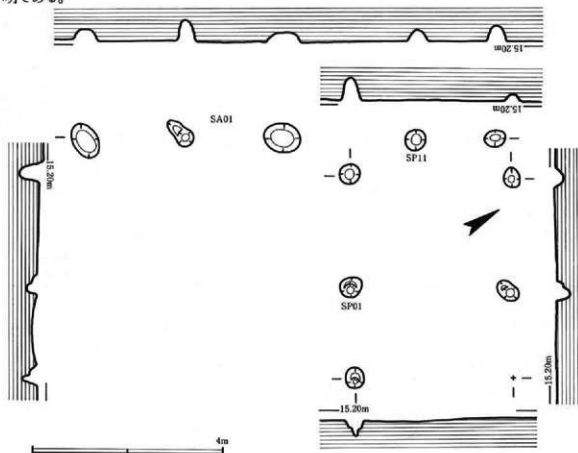
SB06 (第88図 写真80) 南側に位置する2間×2間の正方形に近い形をした側柱の建物である。棟方向は、 $N90^{\circ} E$ 。梁行長 328cm ・桁行長 368cm を測る。SB05と同一の方向性をとる。土師器片しか出土しなかったが、SB06は、12世紀ないし13世紀の建物と考えられる。

SB08 (第89図 写真80) SB07の内部に位置する2間×2間の側柱の建物である。棟方向は、 $N5^{\circ} E$ 。SB07とほぼ同一の方向性をとる。梁行長 376cm ・桁行長 388cm を測り、ほぼ正方形の形をしている。SP10、SP24から土師器皿、土師器環(128)、SP38から羽釜(129)が出土している(第90図・写真84 125~127)。129は羽釜で、外面には指圧痕が残り、鈎部分はヨコナデで調整されている。内面はハケ調整されている。SB08は、西側に隣接するSB09とは、主軸方位はほぼ直交するが、方向性は同一である。この2棟は、同時期に存在していたと推察できる。SB08は、12世紀ないし13世紀前半の建物と考えられる。

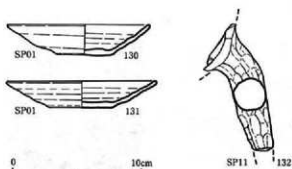
SB01・SA01 (第91図 写真81) 北側に位置する柵を伴った1間×2間の側柱の建物である。写真82の上方が北である。棟方向は、 $N58^{\circ} W$ 。梁行長 340cm ・桁行長 440cm を測る。また、住居の西側に位置する柵の方位は、 $N32^{\circ} E$ 。柵と建物の主軸方位が直交するが方向性は同一である。全長 456cm である。SP01から、2点の土師器環(第92図・写真85 130・131)とその下から炭化した羽が出土している。2枚の環は、ほぼ半分に分かれた物が重なってあった。これらの遺物は、「地鎮め」の祭りで使用した埋納資料と思われる。このように羽が出土するのは大変珍しいことである。同様の例と

して、徳島県の上喜米姪子〜中佐古遺跡(1999年)で柱穴から銭貨・皿とともに多量の羽が出土した事実が報告されている。さらに、SP11からは瓦質土器の足鍋(132)が出土している。SB01は、15世紀ないし16世紀の建物と考えられる。

SB02・SA02(第93図 写真81) SB02は、SB01と重なり合うように位置し、主軸方位はほぼ直交するが、同一の方向性をとる。同様に柵を伴った2間×3間の側柱の建物である。棟方向は、N31° E。梁行長408cm・桁行長664cmを測る。柵の方位は、N33° E。全長890cmである。SP12、SP106、SP107から瓦質土器の足鍋(第94図・写真86 133~135、137・138)、SP85からは瓦質土器播鉢(136)が出土している。足鍋の内面にはいずれもハケ調整の痕が残る。SB02は、15世紀ないし16世紀の建物と考えられる。SB01とSB02は、遺構の方向性や規模、形から考え建替住居と推定できるが新旧関係は不明である。



第91図 6地区SB01・SA01実測図



第92図 SB01・SA01関連遺物実測図

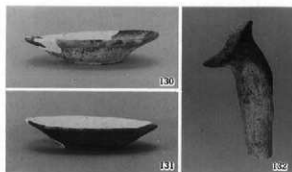
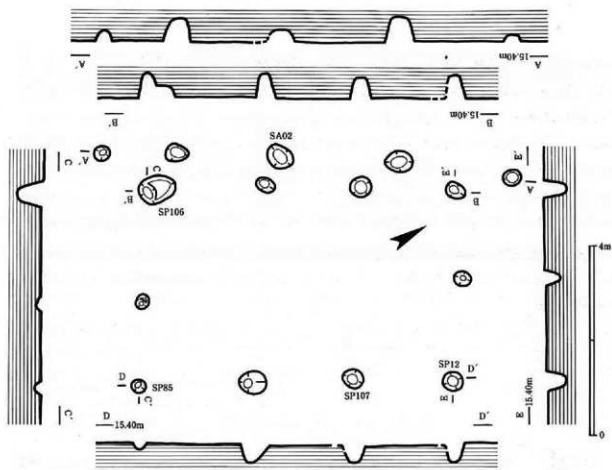
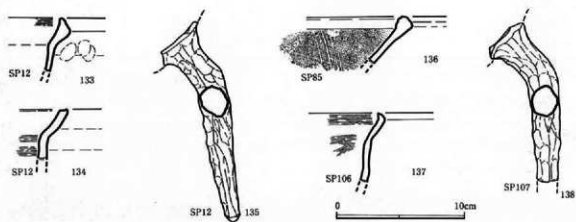


写真86 SB01・SA01関連遺物



第93图 6地区SB02・SA02実測図



第94图 SB02・SA02関連遺物実測図

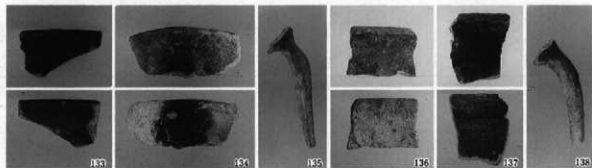
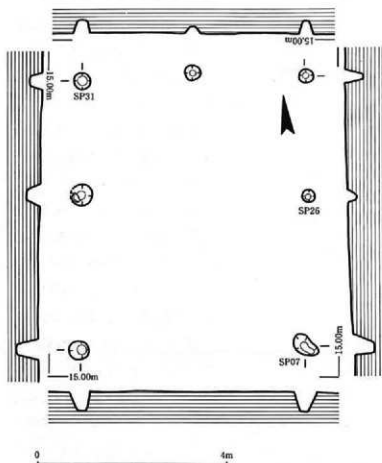
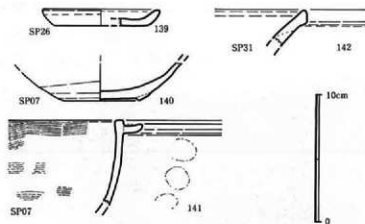


写真86 SB02・SA02関連遺物

SB07 (第95図 写真80) 南端に位置する2間×2間の総柱の建物である。棟方向は、 $N6^{\circ}E$ 。梁行長472cm・桁行長568cm測る。SB08とほぼ同一の方向性をとる。西側に位置するSB10とも方向性はほぼ同一である。SP07から土師器椀、SP26から土師器皿、SP07から羽釜(141)、SP31から須恵器の椀鉢(142)が出土している(第96図 写真87 140・139)。141の羽釜の外面には指頭圧痕が残り、鈎部分はヨコナデで調整されている。内面はハケ調整されている。12世紀ないしは13世紀前半の建物と考えられる。



第95図 6地区SB07実測図



第96図 SB07関連遺物実測図

SB05 (第97図 写真80) 6地区の南側に位置する2間×2間の側柱の建物である。棟方向は、 $N90^{\circ}E$ で、SB06と同一の方向性をとる。梁行長432cm・桁行長664cmである。水位が高く、砂質地盤という居住条件の悪い土地であるが、比較的規模の大きい柱穴が多い。SP04から土師器の坏(第98図・写真88 143)と瓦質土器の羽釜(144・145)が出土している。144の羽釜は口径が28cm、内面にハケ調整の痕が残る。外面上部には指頭圧痕が残り、粗い縦方向のハケ調整の後、

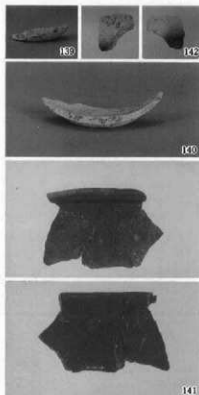
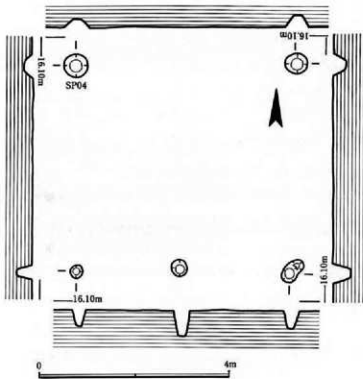
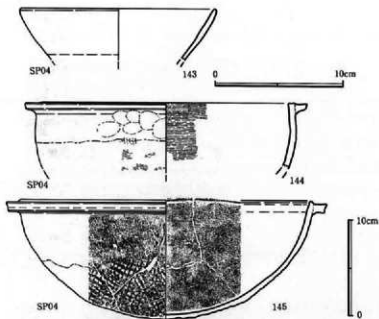


写真87 SB07関連遺物



第97図 6地区SB05実測図



第98図 SB05関連遺物実測図

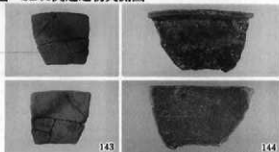
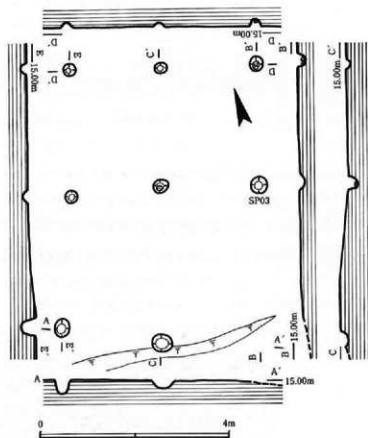


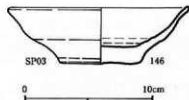
写真88 SB05関連遺物

横方向に細かいハケで調整されている。145の羽釜は、残存率約50%で口径が推定31cm、内面にハケ調整の痕が残る。外面上部は、粗い縦方向へのハケ調整の後、横方向に細かいハケで調整されている。外面底部は格子タタキ痕が残るが、タタキ痕の一部はハケによって消されている。SB05は、12世紀ないしは13世紀の建物と考えられる。SB03（第99図 写真82）調査区のほぼ中央に位置する。南東方向の角柱が調査区外にあたり、検出できなかったが、2間×2間の総柱の建物であったと考えられる。写真81の上方向が北である。棟方向は、 $N16^{\circ} E$ 。SB04・SB11とはほぼ同一の方向性をとる。梁行長396cm・桁行長548cmを測る。SP03の中央部底から、レキを上に乗せる形で土師器の坏（第100図・写真89 146）が出土している。146の底部は回転糸切りである。第99図で示すように、その他2つの柱穴からも詰め石が確認された。8個の柱穴の深さの平均は約15cmと浅い。これは、水田化される際に削平を受けたためと推察される。SB03は、11世紀ないし12世紀の建物と考え





第99図 6地区SB03実測図



第100図 SB03関連遺物実測図



写真89 SB03関連遺物

られる。

以上、6地区で復元された建物と遺物について説明してきたが、建物の特徴としては、

- 1) 床面積は、10～19㎡が4棟、20～29㎡が5棟、30～39㎡が2棟、と特別大きな建物はなく、平均で22.6㎡と規模が平均化している。
- 2) SB03を含めた6地区南側に検出された8棟の住居は、方向性で2つに大別できる。SB03、SB04、SB11は、ほぼ同一の方向性を持っており、同時期に存在したと考えれば、SB04、SB11も11・12世紀の建物と推定できる。

などであった。

(10) 6地区の溝状遺構

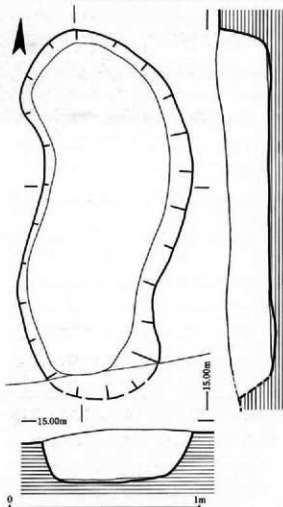
今回の調査において、6地区で検出された溝状遺構は1条であった。

SD01 緩やかな弧状をえがき、東端が6地区の谷状地形と接し、西端は調査区外に延びる。東西方向に約8m、深さ4cm～8cm、幅24cm～36cm、西側が高く標高差8cm、と緩やかな傾斜をもつ浅い遺構である。埋土は、小石を含む灰褐色の単一層からなる。標高差からもSD01は、谷状地形に流れ込んでいたものと推察できる。ただ、出土遺物が少なく、年代や隣接する建物SB03や土坑SK02などの他の遺構との関連は不明である。

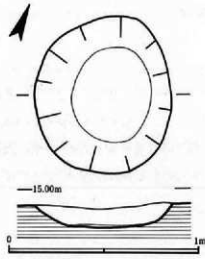
(II) 6地区の土坑

今回の調査において、6地区からは、2基の土坑が検出された。出土遺物が乏しく、用途や時期についてはいずれも不明である。

SK01 6地区北東側に位置する、長軸81cm、短軸74cm、深さ14cmの浅い円形土坑である。埋土はやや粘質で小石を含む浅黄橙色の単一層からなる。出土遺物としては、土坑中央部から土師器片が出土したが、摩滅が激しく時期は不明である。6地区谷状地形の落ち込み部に当たり、用途についても不明である。



第101図 6地区SK02実測図



第102図 6地区SK01実測図

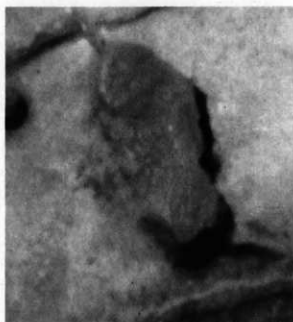


写真90 6地区SK02完掘（南より）

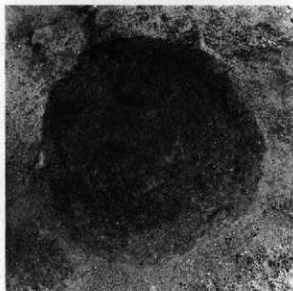


写真91 6地区SK01完掘（南より）

SK02 6地区の中央部や東よりに位置する。SK01の南西13mの地点にあり、南北の長軸196cm(推定)、短軸84cm、深さ28cm、の大型の土坑である。南端部を水田化の際、削平を受けており、わずかではあるが湧水がある。埋土は、小石を含む砂質の明黄褐色の単一層からなる。土坑埋土から土師器片がいくつか出土したが、遺物が小さく、摩滅も激しいため、時期・用途を特定することは不可能であった。北側に隣接して6地区谷状地形に流れ込む溝(SD01)があるが、関連は不明である。

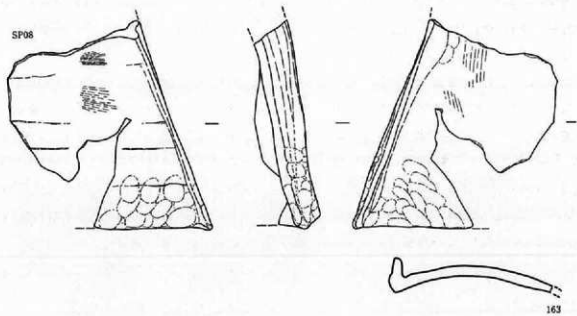
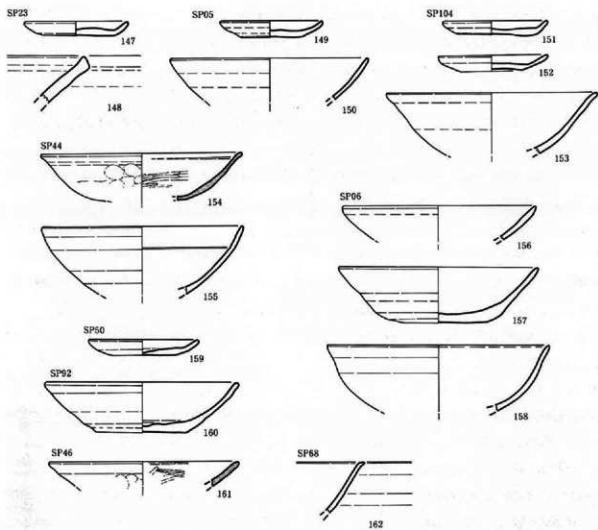
⑫ 6地区の柱穴と遺物

6地区では420個の柱穴が確認されている。このうち、埋土中に遺物を含んでいたものは107個である。ここでは建物として復元できなかった柱穴について、主な出土遺物について概説する(第103図・写真92)。また、4・5地区と同様6地区でも、遺物を柱穴内に埋納または投棄したものが比較的多く含まれているため、合わせてこうした状況を示す事例を紹介する。

147~158は共伴関係を知り得る資料である。147・148は土師器皿と瓦質土器こね鉢の共伴資料である。148は軟質の東播系須恵器またはその模倣品と考えられる。内面には炭素の吸着がみられない。149・150および151~153は土師器皿と碗の共伴資料である。154・155は瓦器碗と青磁碗の共伴資料である。154は内面には粗いミガキがみられ、外面には指頭圧痕が顕著である。内面口縁部直下に沈線をもつ。畿内からの搬入品とみられる。155は内面の一条の沈線以外は内外とも無文である。156~158は土師器杯・碗の共伴資料である。157の底部切り離しは回転糸切りによる。

159~163はおのおの別個の柱穴から出土した遺物である。159・160は土師器の皿・杯であり、いずれも底部切り離しは回転糸切りによる。161は畿内からの搬入品とみられる瓦器碗である。内面には粗いミガキ、外面に指頭圧痕がみられる。小片であり、反転復元した。162は白磁碗である。163は土師質の甕形土器である。焚口部の、向って右側部分の破片とみられ、貼り付けによる疵が焚口部に沿って裾部まで連続しているタイプである。裾部幅40cm前後、焚口部の高さ25cm前後、高さ30cm前後に復元される。内・外面には粗いハケ調整のち粗いナデを行う。内面には粘土帯の継目が確認でき、裾部では内・外面とも指頭圧痕が顕著である。

第104図・写真93は遺物出土状況に特徴のある柱穴を集成したものである。6地区SP04は底面に接するように瓦質土器羽釜破片が集積されていた例である。6地区SP03は底面に置いた土師器杯の上に甕が載せられていた例である。6地区SP06は底面および埋土上位に土器が詰められた例であるが、10~15cmの直径ながら深さが50cmを超えており、やや異質である。6地区SP10および6地区SP06は底面付近から土師器皿が出土した例であるが、裏向き・表向きの両者があることがわかる。6地区SP01・6地区SP104は柱を抜き取ったあとに土器を埋めたと考えられる例である。6地区SP01は裏向きに重ねられた2点の土師器杯の下から炭化米が発見された(P83・84参照)。



第103图 6地区柱穴出土文物实测图

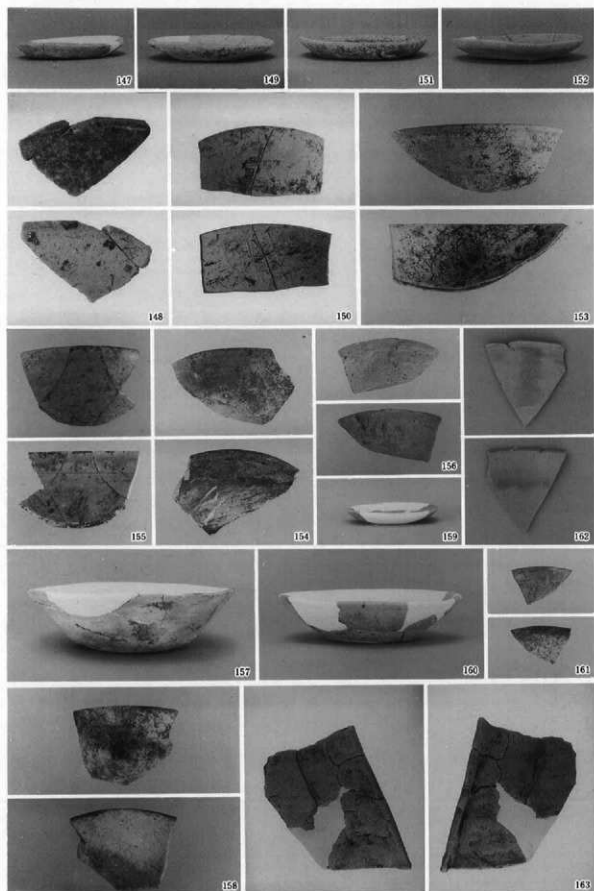
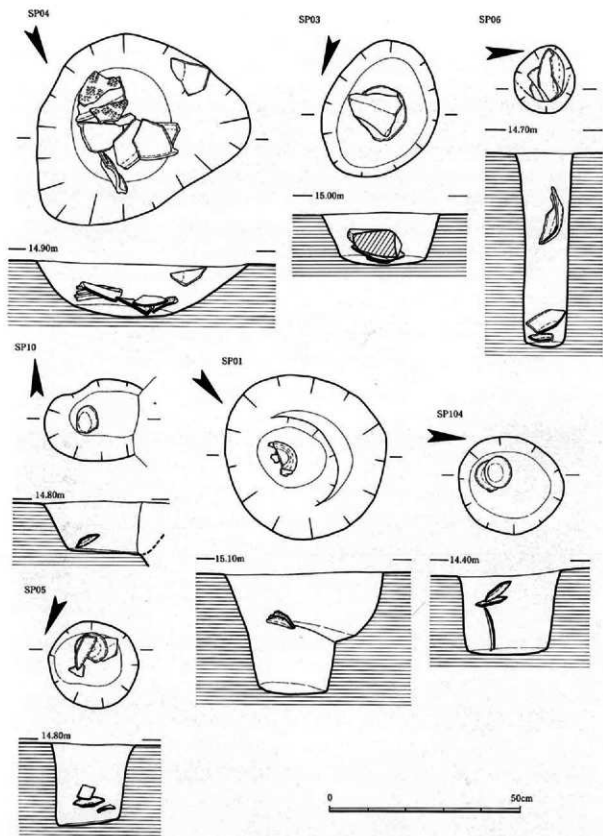


写真92 6地区柱穴出土遺物



第104图 6地区柱穴遺物出土状况

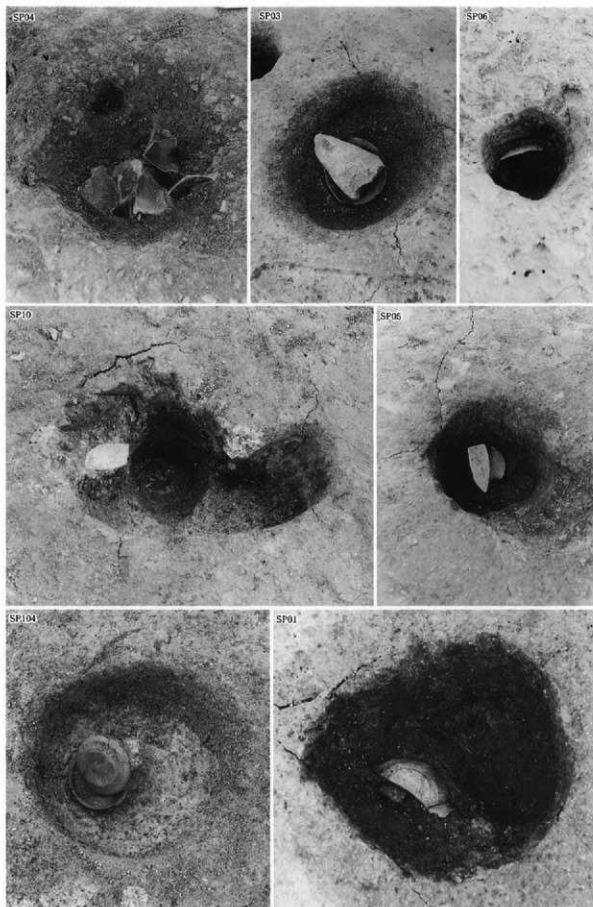


写真93 6地区柱穴遺物出土状況

(13) 6地区の谷状地形と遺物および遺物包含層出土の遺物

6地区の中央東寄りに浅い谷状の地形が確認された(第105図)。確認された部分の長さ約20m、最大幅12.2m、最も深い南端部分での深さ約60cmで、湧水がある。2ないし3段の平坦面をもっており、西側では中段に幅1.5mを超える広い平坦面をもつ。底面は平坦・直線状で、幅は2.4m前後と一定しており、南北両端における標高差は約20cmである。この谷状地形については、人工的に掘削された水場遺構の可能性を考慮すべきであろう。

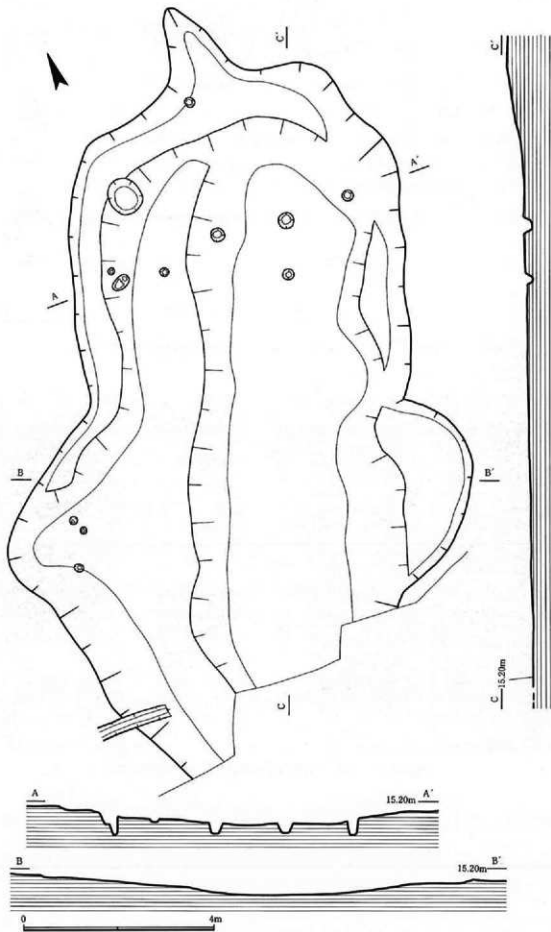
谷状地形の底面および傾斜面には土坑1基と柱穴状の掘り込み11個がある。柱穴状の掘り込みのうち北寄りの5個については、ほぼ直線上に並んでいる上、底面の標高がほぼ一定している。このことから、この地点には本来、谷状地形に伴う何らかの施設が存在していたと考えられる。

底面を基準としてみた谷状地形の主軸方位はN23°Eであり、これは北側に隣接して存在する建物跡(6地区SB01・SA01および6地区SB02・SA02)とほぼ同一の方向性である。出土遺物の示す年代はいずれも15～16世紀であり、谷状地形とこの建物跡は併存していたと考えられる。埋土中に含まれる遺物は比較的少なく、投棄坑と考えることはできない。

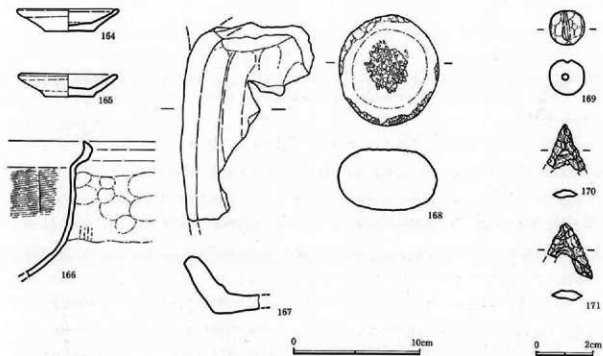
164～168(第106図・写真94)は谷状地形から出土した遺物である。164・165は西側中段から出土した土師器皿であり、両者は完形ないしほぼ完形である。いずれも西側の中段平坦面の直上から発見された。11～12世紀に比定される資料である。166は埋土最下層の、底面直上から出土した瓦質土器鍋である。底部外面のタタキ痕はナデによって消される。166は15～16世紀に比定される遺物であり、谷状地形の最終的な埋積時期を示すと考えられる資料である。167は竜形土器の一部と考えられる土師質の土製品である。焚口部の向って右側部分の破片とみられるが、裾部・底は残存しない。168は砂岩の円礫を転用したたたき石であり、全周に使用痕がみられる。

169～171(第106図・写真94)は主に6地区南半を覆うように存在した遺物包含層から出土した遺物である。遺物包含層は小礫を多く含む砂質土であり、洪水等により形成された層である可能性がある。169は直径2.8cmの、球形に近い土師質の有溝土錘である。170・171は安山岩製の打製石鎌である。

出土遺物の面で6地区が4・5地区と最も大きく異なる点は、金属生産関係の遺物の出土がみられないことである。遺構および谷状地形の埋土・遺物包含層を含め、6地区からはスラグも発見されなかった。このことは、11～12世紀において4・5地区では鉄ないし銅の生産が行われ、6地区では行われなかったことを示している。



第105图 6地区谷状地形实测图



第106図 6地区谷状地形および遺物包含層出土遺物実測図

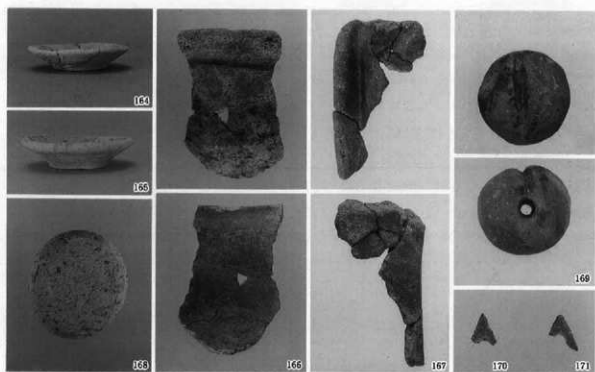


写真94 6地区谷状地形および遺物包含層出土遺物

4 ま と め

1 はじめに

平成11年度の切畑南遺跡における調査は、昨年度から引き続き2年次の事業となる。昨年度の切畑南遺跡の概略を述べてみると、出土した遺物から縄文時代・弥生時代・古墳時代を通じて、人々の生活の形跡をうかがい知ることができる。遺構・遺物が多く検出されるのは13世紀以降のものであり、集落跡として確認されるのは、室町時代以降である。特に、この時期において注意を引くことは、墨書土器・瓦器碗の出土である。これらは、当時この地に有識者の存在がうかがえるとともに、人々の交流が頻繁に行われたことが推測される。また、低湿地より出土した、ルツボ、その内面に付着したスラグと靑靑。遺跡の北西に位置する金山の存在。これらから、銅精錬に関わる工房跡が存在する可能性が浮上した。しかしながら、遺跡全体の状況をつかむには調査区が限定されており、それぞれの推測を解決していく糸口を見いだすまでには至らず、次年度の調査の成果を待つこととした。

2 成果と考察

以下、上記の成果や課題を踏まえ、本年度の成果に考察等を加えながら、今後の課題について述べて行きたい。今年度の切畑南遺跡は、昨年度の対象地区から北西の方向へ300mの所へ位置し、4・5地区は隣接し、6地区は昨年度の対象地区1地区と隣接しており、5地区から南西へ200mの所へ位置する。遺構・遺物の残存状況は比較的良好である。調査によって明らかになった主な遺構は、掘立柱建物跡39棟、溝状遺構7条、土坑25基、埋葬跡1基、炉跡7基、柱穴1500余りを検出することができた。遺構に関係する遺物は、土師器（皿・坏・碗）、須恵器、甕形土器、瓦質土器（羽釜・足鍋・摺鉢）、青磁（皿・碗）、石製品（滑石製石鍋・たたき石）、鉄製品（鏃・釘）、銅製品（鈴・釘）、銅塊、などである。また、包含層出土の遺物として甕形土器、緑釉陶器、轆の羽口、土鯉、細石刃、石鏃、石斧、滑石製紡錘車などが確認された。これらの遺構・遺物の出土状況から、旧石器時代から縄文時代、少し時間的空白をみるが奈良・平安時代、鎌倉・室町時代と断続的に人々が生活していたことをうかがい知ることができる。

掘立柱建物について

今回の調査で検出された掘立柱建物は、4地区17棟・5地区11棟・6地区11棟の計39棟である。建物を時期的な変遷で見ると、39棟のうち33棟が11世紀から12世紀に集約される。棟方向から時期を大別していくと、11世紀代が9棟・11世紀後半から12世紀前半が12棟・12世紀代が12棟である。12世紀から13世紀のものが3棟、15世紀から16世紀のものが3棟である。ただ、12世紀代の建物は棟方向が一致しないものがある。次に建物の配置についての特色として、どの地区においても、棟方向が平行又は直交する建物が2～3棟が隣立していることである。これらのことから、棟方向が等しい場合同時期の建物と考えられるが、棟方向が違っていても建物の時期が違うとは言いきれない。立地条件等の制約で、棟方向が変わったと考えられる。また、4地区の建物と5地区の建物から4基の炉が検出されていることから、住居と倉庫又は工房としての建物が存在したのではないかと考える。ただ、このことは11世紀～12世紀の建物に言えることで、13世紀以降の住居については、建て替えの跡がうかが

えるが上記のことは、あてはまらない。

上記のことから、集落の存続時期は11世紀から12世紀にかけてであって、それ以後は集落として機能しなくなったといえる。この事象から、自然要因か社会的要因かによって集団の移動があったと考えられるが、昨年度の調査において、13世紀から16世紀にかけての集落跡が確認できたことから、切畑地区の北部から南部へ人々が移り住んでいったとも考えられる。

炉について

炉跡は、4地区に2基・5地区に5基合計7基検出されている。他に4地区より、火床炉の底に当たると推定される焼き締めりが確認されている。検出された炉は、すべて火床炉である。4地区より甕の羽口が検出され、5地区の遺物包含層より羽口の破片が数点確認されている。ルツボや鋳型等鋳造に関わる遺物が検出されていないことから、製錬炉・精錬炉や鍛冶炉が考えられる。炉内の土壌及び周辺の土壌分析の結果から考察すると、4地区・5地区の炉からは銅が一般土壌（0.002%）の5倍から20倍含有していることが明らかとなった。一方鉄については、4地区の炉からは13%、5地区の炉からは44%という数値となった。また、スラグを分析した結果は、70%が鉄であることを示した。これらの結果は、限られた試料での結果であり性急に炉の目的を断定することはできないが、銅製錬・銅の精錬または鍛冶と推定される。ただ、4地区・5地区から確認されるスラグ（総重量が7kg）が多いと考えるか少ないととらえるかは、考察の余地を残そう。また、前文で述べたようにルツボ・鋳型の出土が確認されないことは、現時点で出土していないのであって、鋳造に関する炉の可能性としては残しておきたい。

銅塊・銅製品・鉄製品の出土について

4地区の住居に関わる柱穴から、脚付皿（11世紀に位置づけられる）に載せられた銅塊6点と鉄製の釘1点に加え初が出土している。銅塊の成分分析の結果は、銅75%・砒素16%を主成分とする青銅であった。この銅塊等の検出から、銅の精錬または鋳造に関する祭祀が行われたと考える。5地区の遺物包含層より銅製の釘と銅鈴が検出されている。銅釘の成分は、銅99%・砒素1.4%の純銅であり、銅鈴の成分は銅79%・砒素7.4%の青銅であった。これらの分析結果から注目すべき点として、銅の釘以外の遺物には、砒素が多量に含有していることであろう。葉賀七三男氏は「砒素を1%銅に含有しているとすれば溶解温度は20度下がる」と述べている。銅の融点が1083度であるとする、銅塊に含有している砒素16%であるから、763度で銅塊が融解することになる。材料銅としては、人体への影響を除けば、経済的である。出土の状況から考えると、この地で砒素を含有させるための作業が行われた可能性があり、銅の精錬を行う工房の存在をうかがわせる。

緑釉陶器について

5地区の谷状地形の埋土中や遺物包含層から緑釉陶器片が16点出土した。その内5点は、畿内方面からの移入品であり、残りの9点が防長産と考えられる。長門産か周防産かは遺物が小片のため断定できなかった。これらの遺物の時期については、9世紀から10世紀と考えられる。

周防鋳銭司が操業を開始し、それと平行して緑釉陶器片の生産が行われたとすると、長門と同様に中央による一定の規範設定のもとで、国衙が関与する生産体制であったと考えられるため、切畑における緑釉陶器の出土は、当時官人の存在を推測できる。

切畑南遺跡と金山

切畑南遺跡の北西1.3kmに金山がある。古老の話では、この山に銅山の坑道があり幼少のころ中に入ってよく遊んだと聞く。明治10年吉敷郡切畑村の銅鉛鉱山が開坑されており、金山から銅が産出されたようである。また、時期は江戸期に遡るが元禄14年以前に金山から銅を産出したとあるが、鉱山としては機能していなかったようである。また、金山の南東裾部に由来時期は不明だが「金谷」（本来は金屋か？）という小字名が存在し、鍛冶が行われていた可能性がある。上記の事実から、金山を銅の産出地とし、切畑の地で製錬・精錬又は鍛冶が行われたと推定できる。

『続日本紀』「天平2年3月丁酉 周防國熊毛郡牛嶋西汀、吉敷郡達理山所出銅、試加冶練、並堪為用、便令當國採治以充長門鑄錢、」という記述がある。当時採銅は国司の管轄下で行われ鑄造は鑄錢司の管轄下で行われていた。銅を製錬又は精錬するには銅山が近くにあること、炭や灰・糠の羽口等を形成する良質の粘土や銅を運搬する経路の確保が必要であろう。幸い、切畑は良質の粘土を産出することが知られており、8世紀・9世紀頃は、切畑まで海が湾入していたと言われる。製錬又は精錬の工房の立地条件としては最適と考えられる。

当時の吉敷郡内に本遺跡が所在したとすると、「達理山」は金山と考えられる。『続日本紀』文中に、銅を製錬して長門鑄錢司へ送ったとあり、達理山（金山）から採銅し切畑の地で銅鉛石を製錬加工し、材料銅としたと考えられる。

次に、周防鑄錢司と切畑との関係を考えてみたい。長門鑄錢司が衰退していく中で、周防鑄錢司が置かれた。切畑の地から周防鑄錢司まで直線で4km程度である。切畑から畦倉峠を越えると4.5kmで周防鑄錢司である。当時の山陽道や海運を利用することも考えられるが、峠越えが最短距離である。

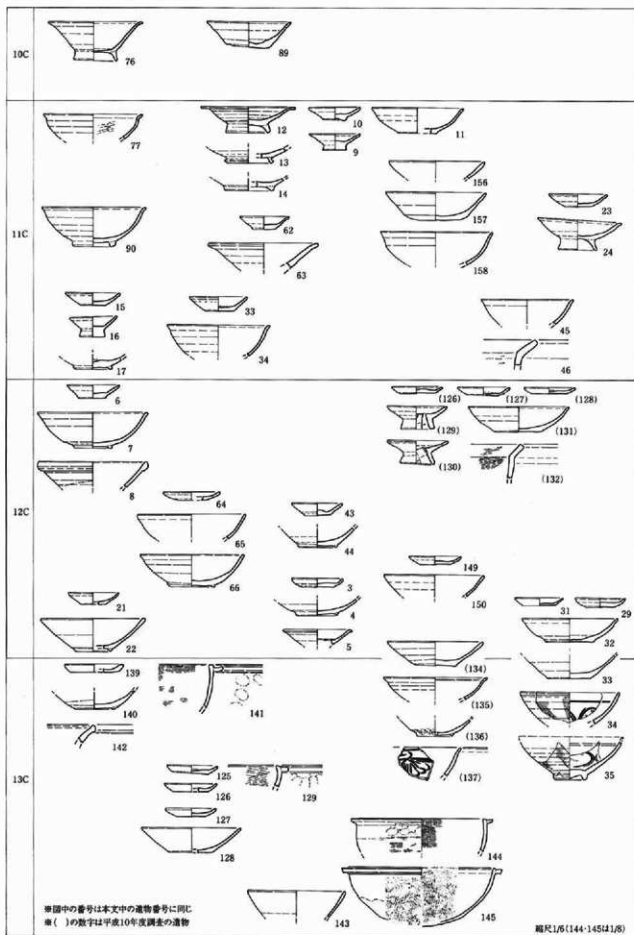
また、春日神社（山口市陶糸根）拝殿絵馬「国司總社參拝及鑄錢司古図」に「銅座」が記されている。この位置は確認されていないが、「銅座」という小字名が現在も残っており、その地は長沢池の北東にあたり金山の南西2.3kmの所にあり、畦倉峠を越えて1kmであることも付記しておきたい。

3 おわりに

今回の調査で切畑南遺跡の調査は完了する。昨年の調査成果を踏まえながら、今年度の切畑南遺跡から得た成果を考察した。昨年度と今年度の調査範囲は切畑地区のほんの一部分である。僅かな調査結果ですべてを断定することはできないが、8世紀以降近世に至るまで、金山は官営又は私営の銅鉛山として機能していた言えよう。その裾部に当たる切畑南遺跡において11世紀～12世紀に製錬や精錬又は鍛冶が営まれたと考えたい。少ない事実から考えられる、可能性としてまとめた。今後の多方面からの資料の集積を待ちたい。

参考文献

- 財団法人山口県教育財団『東禪寺・黒山遺跡Ⅰ』1996年 山口県文書館「古代史編」（『山口史資料』）1975年
- 財団法人山口県教育財団『東禪寺・黒山遺跡Ⅱ』1997年 山口県教育委員会『周防鑄錢司跡』1978年
- 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書』1982年 防府市教育委員会『周防の国衙』1967年
- 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会『中村遺跡』1987年 防府市教育委員会『防府市史 上巻』1980年
- 防府市教育委員会『続 防府市史』1981年 美東町教育委員会『長登銅山跡Ⅰ』1990年
- 美東町教育委員会『長登銅山Ⅱ』1993年 美東町教育委員会『長登銅山Ⅲ』1998年 坪井清足・平野邦雄 監修『銅と鑄錢司』（『新版「古代の日本」』）1992年 葉賀七三男『アセニカルブロンズ』（『日本産銅史新見』）1988年



第107図 切畑南遺跡出土の古代～中世土器編年試案（岩崎）

切畑南遺跡炉床跡土壌成分分析および出土遺物成分分析（抄）

応用地質株式会社

1. はじめに

本報告書は、応用地質株式会社が実施した「切畑南遺跡炉床跡土壌成分分析および出土遺物成分分析」について取りまとめたものである。以下にその概要を記す。

1. 調査の概要

- 1) 調査件名：切畑南遺跡炉床跡土壌成分分析および出土遺物成分分析
- 2) 調査地：山口県防府市大字大道切畑地内 切畑南遺跡
- 3) 調査期間：平成11年11月10日～平成12年1月31日
- 4) 調査目的：切畑南遺跡の4地区、5地区では、墓や土坑、祭祀跡などとともに、炉跡や作業小屋のような遺構が検出されている。また、遺物としては、緑釉陶器片や青磁皿、釘や鉄、鈴などが出土している。本調査の目的は、第一に炉跡が何の炉であったかを確認すること、第二に出土した遺物の組成を調べることである。

分析資料の詳細は次の通りである。

土壌試料 … 4地区2号炉跡内、同炉跡周辺、5地区2号炉跡周辺、スラグ 各1

遺物 … 5地区谷状地形出土銅釘、同 銅鈴、4地区SP17出土銅塊 各1

- 5) 調査内容：蛍光X線分析 土壌資料 5資料、出土遺物 3資料
- 6) 担当者：軽部 文雄、小林 恵（応用地質株式会社 技術本部歴史環境部）

2. 分析結果

2-1. 切畑南遺跡炉床跡土壌の蛍光X線分析

1) はじめに

山口県防府市に位置する切畑南遺跡において検出された炉跡遺構について、その土壌試料の組成を分析することにより、何に利用された炉であったかを推定する。

分析試料は、炉跡内の土壌2試料、炉跡周辺の土壌2試料、スラグ1試料である。

2) 分析方法

分析に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SEA-2120、セイコー電子工業製）である。

採取した土壌試料はオープンで乾燥し、粉砕機を用いて微粉砕した。細かく、均一になった試料を約2g秤量し、分析専用の容器に入れて測定した。測定条件を表1に示す。

3) 分析結果

得られた測定値を表2に示す。測定に際して、測定値の再現性を確認したところ、ほとんど分析値に差は見られなかったことから、各試料とも1回ずつ測定を行なった。

表1 土壌資料測定条件

測定時間 (秒)	300	300
コリメータ	φ10.0mm	φ10.0mm
励起電圧 (kV)	50	15
管電流 (uA)	自動設定	自動設定
フィルター	なし	なし
雰囲気	真空	真空

分析の結果から、各試料とも大まかには鉄 (Fe)、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al) を主成分とする組成を示した。炉跡内と炉跡周辺の値を比較すると、4地区2号炉跡、5地区2号炉跡とも、鉄の含有量は炉跡内の方が炉跡周辺よりも多いという結果が得られた。また、5地区2号炉跡については、銅の含有量も炉跡内の方が炉跡周辺よりも多かった。さらに、スラグについては、組成の約70%を鉄が占める結果になった。

表2 土壌試料測定結果一覧

	4地区2号炉跡 炉内	4地区2号炉跡 炉周辺	5地区2号炉跡 炉内	5地区2号炉跡 炉周辺	スラグ
アルミニウム (Al ₂ O ₃)	24	22	14	26	11
ケイ素 (SiO ₂)	59	67	39	61	18
カリウム (K ₂ O)	2.5	3.2	1.2	1.9	0.2
カルシウム (CaO)	0.7	0.4	0.4	0.5	0.4
チタン (TiO ₂)	0.9	0.7	0.6	1.1	0.3
マンガン (MnO)	0.1	0.2	0.4	0.3	0.3
鉄 (Fe ₂ O ₃)	13	6.4	44	9.2	69
銅 (CuO)	0.01	0.01	0.04	0.01	—
亜鉛 (ZnO)	—	0.01	0	0.01	—
ヒ素 (As ₂ O ₃)	0.01	0.01	0.01	0	—
ルビジウム (Rb ₂ O)	0.02	0.02	0.04	0.02	0.05
ストロンチウム (SrO)	0.01	0	0.01	0	—
イットリウム (Y ₂ O ₃)	0	0	0	0	—
ジルコニウム (ZrO ₂)	0.03	0.02	0.02	0.03	0.01

*分析値は有効数字二桁までで四捨五入

4) 考察

分析結果について検討する。

4地区2号炉跡内、同炉跡周辺、5地区2号炉跡周辺の試料は銅が0.01%程度、5地区2号炉跡内の試料は約0.04%含まれている。一般の土壌中における銅の含有量は0.002%程度であることから (表3参照)、平均的な土壌よりも銅を多く含んでいると言える。したがって、銅を製錬

表3 土壌中の各元素の存在量 (「地球科学的試料の化学分析法」より抜粋)

Cd [mg/kg]	Pb [mg/kg]	As [mg/kg]	Cu [mg/kg]	Zn [mg/kg]	Mn [mg/kg]	Fe [%]
0.1	5~500	5	2~200 (平均20)	10~300 (平均50)	850	1.4~4.0

する過程で使用された炉跡である可能性は考えられる。この時、4地区2号炉跡の炉跡内と炉跡周辺の値がほぼ同じであるが、銅の製錬過程で炉の周辺に銅が飛散した結果とも考えられる。ただし、試料の採取地点位置関係が不明であるため、判断は難しい。

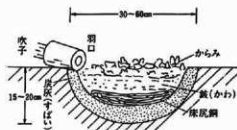
鉄については、4地区2号炉跡の試料は約13%、同炉跡周辺は約6%、5地区2号炉跡内は44%、同炉跡周辺は約9%、含まれている。一般の土壌中における鉄の含有量は1.4~4.0%程度であることから、平均的な土壌よりも多い値を示している。特に5地区2号炉跡内の土壌試料は、主成分を占めるほど大量の鉄分を含んでいる。

以上の結果について考察するために、いくつか考古学的な見地を立てて検討する。

銅製錬における火床炉跡の模式図を第108図に示す。切畑南遺跡で検出された炉跡もこれと似た形態をしている。火床炉の場合、炉内に沈殿した床尻銅を取り出し、さらに製錬して精銅にする。したがって、銅成分はすっかり取り出されることが考えられる。また、銅が溶け込まないよう炉の壁面や床面が粘土で固められているならば、炉跡内の土壌成分を分析しても銅成分は必ずしも顕著に検出されとは限らないとも考えられる。今回の分析で、銅の炉跡と推定されているにもかかわらず、銅の含有量がそれほど多くなかったのは、このような理由による可能性が考えられる。

銅の製錬工程において、銅と鉄は溶錬の段階まで融体として存在する。この融体中の鉄は製錬の段階で炉壁の粘土成分と結合し、製錬滓(FeO-Al₂O₃-SiO₂系)となる。したがって、製錬炉跡の炉壁は鉄、アルミニウム、ケイ素からなる組成を示す可能性が考えられ、5地区2号炉跡内の土壌試料の分析結果は、このことを示しても考えられる。一方、どの試料についても平均的な土壌以上の鉄の含有量を示しており、またスラグ試料の組成は約70%が鉄であることから、鉄製錬炉跡の可能性も否定できない。

以上、今回の結果から何に利用された炉跡であるかについて検討を加えたが、あくまでも推測の域を出るものではなく、今回の結果だけから答えを出すことは難しい。あとは、遺構の形態や規模、出土遺物などによる判断が望まれる。また、ある程度の規模で精銅が行なわれていたならば、銅カワやスラグなどの副産物がもう少し出土しているはずであり、この件については発掘調査結果からの検討が必要であろう。



第108図 火床炉模式図
〔『季刊考古学』62号より〕

表4 金属遺物測定条件

測定時間(秒)	300
コリメータ	φ0.1mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	1000
雰囲気	大気

2-2. 切畑南遺跡出土遺物の蛍光X線分析

1) はじめに

山口県防府市切畑南遺跡において出土した遺物について、蛍光X線分析を用いてその組成を調べることにより、その材質を推定する。

分析試料は、銅釘、銅鈴、銅塊と考えられている金属資料3試料である。

2) 分析方法

分析に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (SEA-5230、セイコー電子工業㈱製) である。

各資料について、表面のごくわずかな箇所を削り除去し、測定面とした。

測定条件を表4に示す。

表5 金属遺物測定結果一覧

	銅釘	銅鈴	銅塊
銅 (Cu)	99	79	75
砒素 (As)	1.4	7.4	16
鉛 (Pb)	0.02	13	8
銀 (Ag)	0.09	0.2	0.1
スズ (Sn)	0.01	0.01	1.2

* 分析値は有効数字二桁までで四捨五入

3) 分析結果

得られた測定値を表5に示す。

分析の結果、金属遺物の組成はおおむね銅 (Cu)、砒素 (As)、鉛 (Pb)、銀 (Ag)、スズ (Sn) から成る。ただし、各元素の含有量は資料によって異なる。

銅釘と考えられている資料は、ほぼ純銅 (銅約99%) で、わずかに砒素を含む。

また、銅鈴および銅塊と考えられている資料は、銅、鉛、砒素を主成分とする青銅と考えられる。

3. 考察

山口県防府市に位置する切畑南遺跡から検出された炉跡の土壌資料について、蛍光X線分析を実施した。比較のため、炉跡内と炉跡周辺の試料について分析した。その結果、分析した試料は平均的な土壌よりも鉄や銅を多く含むことがわかった。特に、5地区2号炉跡内の土壌試料は、炉跡周辺の土壌試料に比べ、多量の鉄を含むことがわかった。また、スラグは、鉄を主成分とし、ケイ素やアルミニウムを多く含んでいることがわかった。ただし、この炉跡が銅の炉跡であるのか、鉄の炉跡であるのかを、今回の分析結果のみから判断することは難しい。考古学的な見地も含めた判断が必要であろう。

また、出土した金属遺物についても蛍光X線分析を実施し、その組成を確認した。その結果、銅釘と考えられている試料は、ほぼ純銅であることがわかった。また、銅鈴、銅塊と考えられている資料は、銅、砒素、鉛から成る青銅であることがわかった。

報 告 書 抄 録

ふりがな	きはたみなみいせき
書名	切畑南遺跡Ⅱ
副書名	平成11年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第16集
編著者名	椿 徹 林 信行 西尾健司 岩崎仁志
編集機関	財団法人 山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 Ⅷ (083) 923-1060
発行年月日	西暦2000年3月28日(平成12年3月28日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きはたみなみいせき 切畑南遺跡Ⅱ	ほうふしきはた 防府市切畑	35206		34° 4' 46"	131° 30' 4"	19990422 ? 19991116	7,200	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
切畑南遺跡Ⅱ	集落跡	古代 ? 中世	掘立柱建物跡 39棟	土師器 瓦質土器 緑釉陶器 鉄製品 銅製品 石製品	精錬銅塊

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第16集

切畑南遺跡Ⅱ

—平成11年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

2000

編集 財団法人 山口県教育財団
発行 山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3番22号)

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
(下関市長府町9番50号)